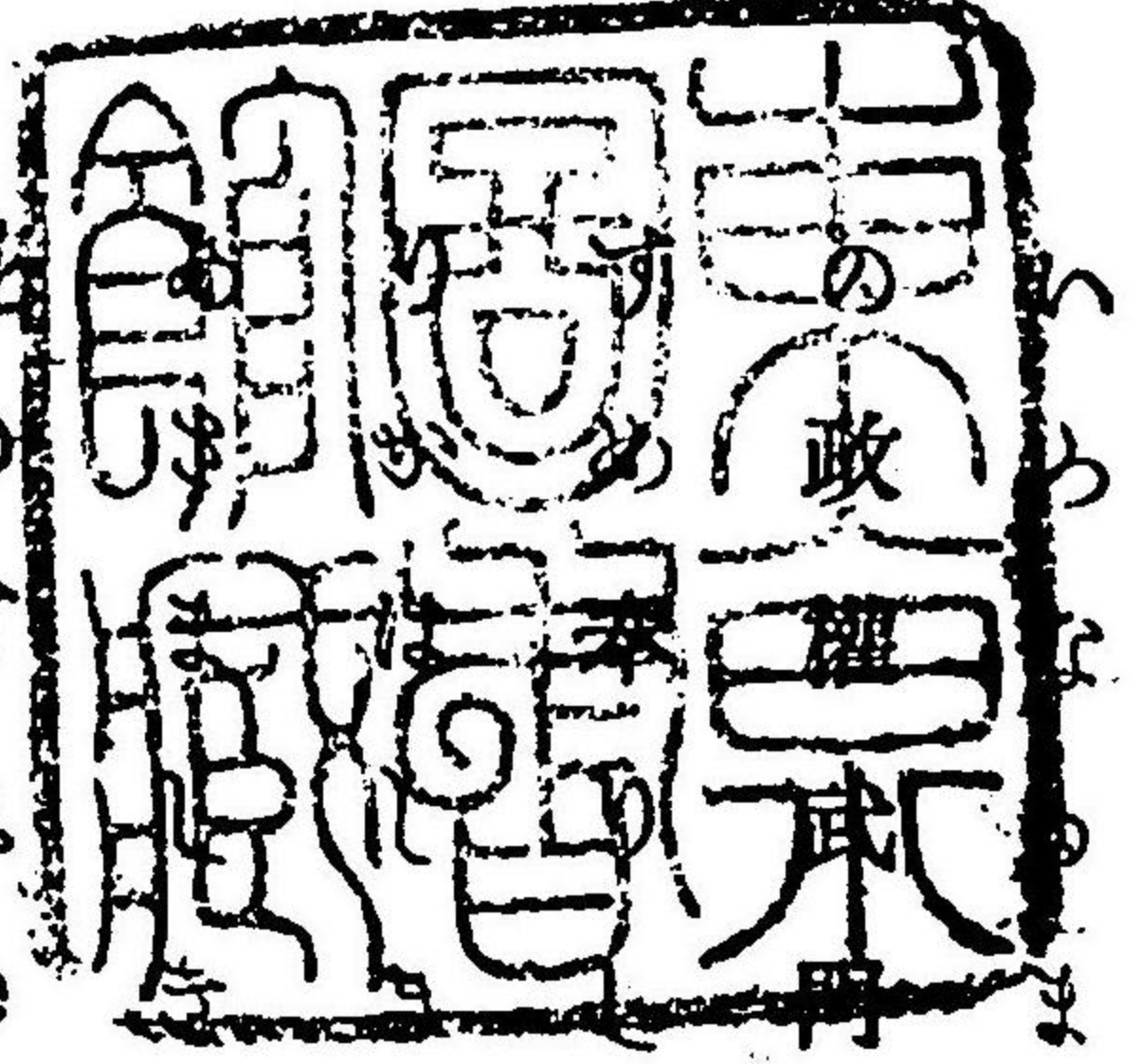




官幣中社 金崎宮御畧傳 完



我朝廷にしてハかけ巻も綾にかし
津神の大御命のほに 治め來給へれ
万にたやすかりしをみくりのなが昔より



はらまはるるにや天下
かつみの神のたりに
に移り恐くそ天皇の稜威をか
よりかた糸のよりほはすみた
もつれさへおほかりしはいと
しれわさになむそは紅花末摘
花のすゑのみつみてあら染ころも
なるとおそこるより心とも奇しく尊き神

代のもとつ大御命の御なるをにらむ空り辨
 へざるあやまちにふん今や大御政を神代
 の昔にかへせ給ひ絶たるを興しをたあ
 たらしきをも棄給ひぬおほむうつくしみ
 にかたみたれありまよにうまれゐひて玉
 の緒たたひとすちに王事につとめ給ひ
 し忠義人たちの靈をなくさめたまはむと
 ていはひまつらすかおほかる中に我敦賀
 の里にしては金か崎の宮をなむ造營たて
 まつる故皇子は命の幸魂も天かけりたり

來まして昔をおとひ今をうれしみ給ひて
 限りなき大御代の夜の守り日の護りとを
 長くまのみあらかに鎮りましまさむ其故
 よしはたおほやけのおほむおもむきを
 ぬしらてはゐるましきまそとて吾友松
 尾の清忠ぬし金か崎の宮御畧傳記といへ
 る一卷をあらはされぬ其心まらまをつく
 つくおもふに此ぬし現身は世の人とある
 をはハ皆靈幸はふ大御神は神徳をふかく
 かまみ奉りはた朝廷に忠義ならまめん

とせちなるおもひをかりのおくかもしら
れて勤め給ひし心さぞいふはかりな
むゐるこはおのれらかおそきおもひ兼に
そいれ紐はおなますちにあなりと此ふみ
ひとひらふたひら披き見るよりやかて今
ぎらのやうおほへてすゝるになみたくま
しうなん

明治廿六年四月廿日

山田正秋

緒言

金崎宮御畧傳此一篇はすまをち本宮に鎮座まします所おかけまくもあ
やにもしまき

尊良親王

恒良親王兩殿下の御履歴なりといへどををく兩殿下いかるは此
所に鎮座ましますにかいかなれば此所に御下向成りしを知らざるべか
らば其由縁を尋ねれば南朝北朝と兩立するにあり兩朝おわかる、由
縁のものは當時皇室の尊嚴犯すべからざるを知らで反臣我意を擅にす
るにありそれ故に元弘建武の亂を起れり元弘建武お亂の起る由縁は遠
く承久お亂にあり承久の亂の起りしは尙遠きに起因する所なり故に此
篇を元弘お亂をなをち笠置御没落よりあらくお死出して終に金が崎
落城までに終りをつぐるなり其間諸所の合戦を載せおれば或を新田足

利二氏の私闘に外ならざるを如くにして両殿下の御事にはあらじ
かしの感なきあたはぞしかれども建武は亂を二氏に私闘の如くに思
ふも大なるひびことなりそも此篇を熟讀せば明瞭ならむ故に両殿下の
御畧傳をはいへど事長さにわたれり幸に讀者よ編者が不文を咎めざ一
編を讀了て其意のある所を諒せられなば幸も亦甚し

明治廿六年三月

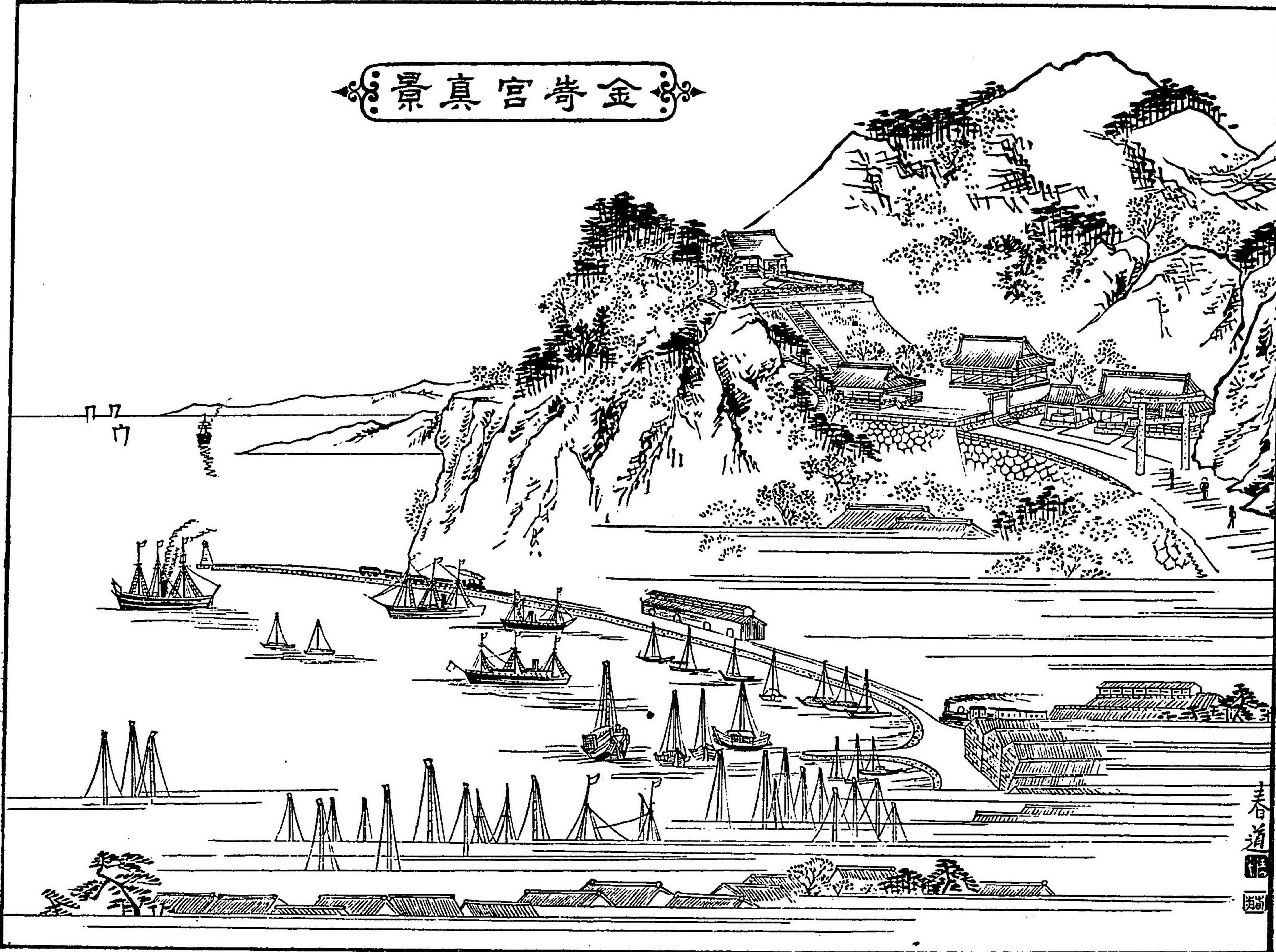
編者識

中世金崎宮御畧傳

目次

- 一 總論
- 一 元弘の亂笠置御没落の事
- 一 一宮土佐國へ遠流の事
- 一 王政復古附新田足利確執の事
- 一 節度使下向尊氏京師を犯す事
- 一 朝敵筑紫に走り再東上の事
- 一 京師合戦春宮一宮北國御下向の事
- 一 杣山城主瓜生判官心替の事
- 一 十六騎の勢金崎入城附船遊の事
- 一 金崎城合戦の事

金崎宮真景



目次終

- 一 瓜生判官旗を擧る事
 - 一 主上吉野へ潜幸の事
 - 一 金崎後攻の勢敗車の事
 - 一 金崎落城一宮薨御の事
 - 一 春宮並將軍宮御隠れの事
- 附 録
- 一 一宮御息所の事

春道

官幣 金崎宮御略傳

總論



越前國敦賀郡金崎に鎮座まします官幣中社金崎宮と齋祭れる御神は掛卷もかしこき人皇
 九十六代後醍醐天皇の第一の皇子中務卿尊良親王と申奉り御母は御子左大臣言為世卿の女
 贈従三位の御腹にて座し、を吉田内大臣定房卿養君にし奉りしかは志學の歳の始より
 六歳の道に長じ給へりされは富の緒河の流を汲み淺香山の故跡を踏みて颯風
 身月夜心を練し給ふ然るに元弘のはじめより世の中騒が敷か、る尊き御身の上にも時
 勢の變遷に應ひては種々の御災難も免かれ難きものにや有けん御父帝と、もに笠置山に御
 難を避け給はれしも夜の嵐に皇居は一片の煙りとなりて松の下殿に御袖をしぼらせ給ひ
 西後土佐の陣へ流の御身とならせ給ひてはせきとむるしからみぞなきとかこたせ給ふ然
 りて武家臣ひと一旦王政復古の大御代となりしも幾程もなくして反臣尊氏の爲に越前の國
 金ヶ崎の城にて御いたましくも御自害ありて葬御ましくけるは歎くにもなほあまりあり
 けり今や五百余年のいにしへの事といへとも亂臣賊子が墳墓をあばきて其骨を昧んと欲す
 るものなり此故に後世寛政年間に慷慨の士高山正之は足利三代の墓前に至り大逆の罪を責

傳畧御宮崎靈金

めて其基を頼ち近世文久の比にも尊王愛國の志士か等持院に入尊氏義隆義滿が三代の木像の首を斬り三條河原に梟したるが如き夫れ此由縁也又足利氏が大逆を企つるの原因を尋ねれば一朝一夕の事にあらま北條氏が故智に習ひて姦謀を巧しふするものなり抑武家が政權を擅にするの激筋を尋ねれば元暦年中に右大將頼朝卿平家を追討して其功あるの時後白河院御威斜ならさりければ自ら請て六十六ヶ國の總追捕使に補せられてより始て諸國に守護を立て庄園に地頭を置き覇府を鎌倉に開く頼朝の長男頼家次男實朝相續て武將に備はるるれども頼家は實朝に討れ實朝は公曉に討れて父子三代僅に四十二年にして盡きぬ其後頼朝卿の勇平時政其子義時私に天下の權柄を執り勢漸四海を覆はんとす此時の太上天皇は後鳥羽院なり武威下に振ひ朝憲上に廢れんことを歎き思召して義時を亡さんとし給ひしに承久の亂出來て天下暫くも靜ならず遂に旌旗日を掠めて宇治勢多に相戰ふ其合戦一月にして官軍忽ち敗北せしかは後鳥羽院は隱岐國へ順徳院は佐渡國へ遷されさせ給ひて義時彌八荒を掌に握る夫より後泰時氏經時時頼時宗貞時相續て七代 政 武家より出て、徳頼民を撫し威萬人の上に被るといへども位四品の際を越ぬす謙に居て仁恩を施し己を責めて禮義を正す是を以て高しといへども危からを盈りといへども溢れを義久より已來儲王攝家の間よ

傳畧御宮崎金

り貴族を一人鎌倉へ申下し奉りて武將と仰ぎて武臣皆拜趨の禮を事とす貞應元年始めて洛中に兩人の一族を置き阿六波羅と號して西國の沙汰を取行はせ京都の警衛に備へ永仁元年より鎮西に一人の探題を下して九州の成敗を司らしめ異賊襲來の守を堅くすれば一天下普く彼下知に隨はせといふ所なく四海の外まで其權勢に服せせといふ者なかりけり朝陽犯されすども殘星光を奪はる、習なれば必しも武家より公家を 蔑にし奉るとしもなければ所には地頭強うして領家は弱く國には守護重うして國主は輕し此故に朝廷は年々に衰へ武家は日々に盛んなり爰に平氏が姦計陰惡の最甚き其本を探究すれば萬世一系の皇統を二流となし天威を分たしめ御治世は大覺寺殿持明院殿と代るく持せ給ふべしと奏し請ふて後醍醐院の御時よりぞ定められける故に儲君の事も御慮に任せられせ天下の事大小となく關東の計らひとしてかしくも一天萬乘の君は空位に置き奉り廢立常なし二流の皇統をして天位を争はしむ當時後深草龜山二帝の御子孫互に天位に登る故を以て東宮は年或は父帝より長せるあり是北條氏が倫理を知らざる故なり此遺毒遂に南北兩朝となりて天下を病しむるに至る固茲代々の聖主遠くは承久の災難を休めんが爲め近くは朝儀の陵廢を歎き思召して東夷を亡さばやと常に御慮を回らされしかとも或は勢微にしてかなはせ或は時未到らせ

傳 畧 御 宮 崎 金

して黙止給ひけるこそ是非なけれ然るに北條は九代相模守高時が代に至りて政道正しから
を行跡甚だ善からせして人の嘲を顧み老民の弊を思はせ只日夜逸遊を事とし朝暮に奇物を
翫びて傾廢を生前に致さんとす是北條氏が滅亡するの時されるなり爰におひて武家を亡
さんと思立せ給ひて元弘の亂は出来にけり而して北條氏は亡び一旦王政復古の大御世とは
なりしも程なく反臣足利尊氏が世を欺きて無智蒙昧の者大義名分のある所を知らせかして
くも一天萬乗の至尊に對し奉り弓を引き矢を放つに至る此時に當つて新田氏楠氏名和氏菊
池氏等の如き天下正義の武士も亦少からせといへとも惜しき哉皇運回らせして逆賊遂に志
を得るに至る嗚呼天なるかな此故に後醍醐天皇は吉野の山奥に潛幸ましくて賀名生とい
ふ所に黒木の御所を立てぞ在しける是則南朝とは申奉る也（北朝とは尊氏が立つる所の主
なり）東宮一の宮は越前の國金ヶ崎の城に籠らせ給ひけるを賊軍の犯す所となり終に延元
二年三月六日金崎落城しければ東宮は捕はれに就き給ひ一の宮は御自害ありて此所にぞ薨
御し給ひける事のおんいはしなんと申も中々おろかなり是より其顛末をつぎ／＼にあら
／＼かひつさんでとき出さんとはするものなり

傳 畧 御 宮 崎 金

元弘の亂笠置御没落の事

爰に人皇九十六代の帝後醍醐天皇と申奉るは後宇多天皇第二の皇子にて文保二年二月御位
に即さ給ふ此御世に武臣北條相模守高時天下の權を擅にして政道正しからず依て武家を
亡さんと思召し立せ給ひて日野中納言資朝藏人右少辨俊基四條中納言隆資尹大納言師賢平
宰相成輔等に仰せ合されて兵を召されけるに錦織判官代足助次郎重範南都北嶺の僧徒少々
勅定に應し又美濃國の住人土岐伯耆十郎頼貞多治見四郎次郎國長と云ふ者武勇の聞ぬあ
かければ資朝卿縁を尋ねて昵び近づかれ是より無禮講と云ふことを始め遊び戯れ舞ひ誦ひ
て其間にて東夷を亡はすべき企の談合ありたりけりしかるに土岐が一族の内に左近藏人頼
貞と云ふ者あり六波羅の奉行齋藤利行が女を娶りて最愛しけるが或る夜の寢物語に此大事
を洩らしけるより六波羅の聞く所となり正中元年九月不意に討手を差向け頼貞國長等が館
をかこみて資殺しぬついで資朝俊基を捕へて鎌倉に渡送す此時主上萬里小路宣房を勅使と
して告文を關東へ下されけるにぞ相模入道もさすがに天慮憚りありけるにや御治世の事を
朝儀に任せ奉り武家いろい申すべきにあらざと勅答を申して告文を返進しけり宣房卿歸洛
して此由奏上せられければ震怒始めて解け群臣色を直されける去程に元弘元年七月再び

傳畧御宮崎金

俊基を捕へて鎌倉に殺し資朝を佐渡に殺す東使二階堂下野判官長井遠江守兵を卒ひて上洛しければ主上俄に南都の方へ御忍びあらせらる（此時尹大納言師賢臨幸の由にて山門へ登られし事など皆人の知る所なれば爰に記せき）萬里小路藤房同舍弟季房二人供奉したり中務の宮も御馬にて追ひて参り給ふ南都東南院へ入らせられ夫より笠置の石室へ臨幸なりて近國の兵を召されけるにぞ此所彼所より馳せ集る者其數を知らず此よし京都へ聞へければ六波羅の兩檢斷宇治の平等院へ打ち出で、軍勢を集め笠置の城へ發向す其勢七万五千余騎笠置山の四方雲霞の如くに充滿したり城中には錦の御旗を白日に耀かしてよろふたる武者三千余人鎧の袖を連ねて楯籠る三河國の住人足助次郎重範一の木戸を堅めて能く射る眞先に進みたる荒尾九郎全彌五郎を射殺し是を軍の始めとして追手搦手をめき叫んで責め戦ふ箭時の音聞の聲暫しも休む時なかりけりされども此城落つべくも見ぬさりが爰に備中國の住人陶山藤三小宮山次郎と云ふ者九月晦日の夜風雨に紛れて五十余人城の北に當り石壁の數百丈聳ひて鳥も翔り難き所より忍び入り城中の所々に火をかけ関の聲をあげ、れば城の内今は敵の大勢攻め入りたりと心得て物具を脱ぎ捨て弓矢をかなぐり捨てて落行ける編織判官代俊政大に戦ひ矢種を射盡し太刀を打折りければ父子并に良等十三人腹かき切りて

傳畧御宮崎金

死にけりか、りける程に主上を初め宮々卿相雲關皆歩既にていづく指すともなく落行き給ふに兩風烈しく道闊くして関の聲此所彼所に聞ければ次第に別々になりて後には藤房季房二人より外は主上の御手を引き進らする人もなし夜盡三日にして山城の多賀郡なる有王山の麓まで落させ給ふ三日まで食を断らければ足たゆみ身疲れて如何ともせん方なく幽谷の岩を枕にて君臣諸共にうつ、の夢に伏し給ふ折節松吹く風に下露のはらくと御袖にか、りければ

御製

さして行笠置の山を出しより天下には隠れかもし

藤房卿泪をかさへて

いかにせんたのひかけとて立上ればなほ袖ぬらす松の下露

か、る處に山城國の住人深須入道松井藏人かために尋ね出されさせ給ひて怪しげなる張輿に扶け乘せ進らせて先づ南都の内山へ入奉る此時此所彼所にて生捕られ給ひける人々には先づ一宮中務卿尊良親王二宮妙臣院尊澄法親王萬里小路大納言宣房花山院大納言師賢を始めとして都合六十一人其外所從眷屬共に至りては計るに遠あらし主上十月三日は風聲を數

傳畧御宮崎金

万の武士に打ち圍まれて六波羅へと着せ給へは男女街に立并ひて人目も憚からず泣き悲む
あさましかりし分野なり一宮は佐々木判官信時と云ふもの、家にわたらせ給ふ御歌に

八

世のうきを空にも知るや神無月ことわり過てふる時雨哉

按せるに笠置御没落の時中務卿は(増鏡)に依れば正成がもとにおとしましつれと御門の
かくならせ給ひぬれば今はかひなしとてそれも都へ入らせ給ひて云々と見ゆれとも楠正
成がもとにおはしつらんには赤坂落城は日を経て後の事なりかくならせ給ふべくも覺ゆ
き故に疑かはしきはとらせまことしく思ふがま、をかいつけ置くになん

一宮土佐國へ遠流の事

元徳二年春の頃大内に和歌の披讀あり序は源大納言親房卿書かれけり御題は花契萬春とぞ
きこぬし御製

時ならぬ花もときはの色にさけわが九重の萬代のはる

中務卿尊良親王

のどかなる雲井の花の色にこそ萬代ふへき春に見ゆけれ

傳畧御宮崎金

つぎくたかれ共はぶきぬ又元弘元年三月の初めつかた花御覽じに北山に行幸なる中務の
宮も参り給ふ兵仗を賜はりて御直衣に太刀はさ給へり此日も歌ともめざるに

中務親王

代々をへてたねじとぞ思ふこの宿の花にみゆきにあとをかさねて

か、るめでたき御代に引かへて元弘二年三月主上を隠岐國へ遷し奉る一宮中務卿尊良親王
は佐々木太夫判官時信を路次の御警固として土佐の畑へ流し奉る既に此日主上を流し奉り
ぬと警固の武士とも申合ひけるを聞召していと心細く思召しける所に武士共數多参りて中
門に御輿を差し寄せたれば御歌に

せさとむるしからみぞなき涙川いかに流る、我身なるらん

宮既に立させ給ふとて瓶にさしたる花をりて

花はなをどまるあるじにかたらへ上我こそ旅に立わかるとも

妙法院二品親王は讃岐國へ流し奉る一宮も妙法院も諸共に兵庫に着かせ給ひたりければ妙
法院の宮より御文を参らせ給ひける

今日まではおなじやと尋ね来てあとなき波と聞ぞかなしき

九

傳 畧 御 宮 崎 金

一宮より御返事

明日よりは路なき波にまがふとも通ふ心よしるべどもなれ

一宮は是より御船に召して土佐の畑へ赴かせ給へば有井三郎左衛門尉が館の傍に一室を構へて置き奉る御おくりの武士にたまはせける御歌に

思ひきやうらめしかりし武士のなごりを今日ぞしたふべしとは

彼の畑と申すは南は山の傍にて高く北は海邊にて下れり松の下露屏にかゝりていと御袖の泪を添ふ磯打つ波の音御枕の下に聞えて是のみ通ふ故郷の夢路も遠くなりけり御着岸の其日より毎日三時の護摩を修せられ何をか御祈念あらせられしとぞ第九宮は未だ御幼稚に御座ませばとて中御門中納言宣明卿に預けられ都の内にぞ御座ありける此宮今年は八歳にならせ給ひけるが御心さまさかしく御座しければ主上巳に人も通はぬ隠岐國とやらんに流されさせ給ふうへは我一人都の内にとりても何かせん我をも君の御座ある國のあたりへ流し遣せかしくかきくとかせ給へば宣明卿も涙を押へてままに御なぐさめ申されしとかや或る時物憂さ御氣色にて中門に立たたまへる折節遠寺の晚鐘かすかに聞ければ

つづくと思ひくらしういひの鐘を聞にも君を戀しき

傳 畧 御 宮 崎 金

御歌のをさくしさいと哀れにぞ聞ゆる後に御諱を恒良と申奉り東宮に立せ給ひて金ヶ崎落城の時賊の爲めに捕れ給ひし金が崎の皇太子殿下と申奉るは此皇子にぞましくける

王政復古新田足利確執の事

元弘三年三月主上潛に隠岐國を出給ひて伯耆國名和の湊に着せ給ふ爰に名和又太郎長年と云ふ者ありて直に主上を船上山に供奉し進らせて俄に兵糧を運び己が館に火をかけ其勢五百余騎にて馳参り皇居を警固し奉る主上船の上に御坐ありと聞ゆしかば國々の兵とも馳せ集る事引きもさらす是より先き楠正成千早の城に據り寡兵を以て關東の大軍としばし戦ひ賊軍勝つと能はざして遠攻めにしたりけるが此寄手の中に上野國の住人新田小太郎義貞と云ふ者あり護良親王の命令を乞ひ受け盧病して東國へ歸り義兵を擧げて鎌倉を責亡す之れ元弘三年五月廿二日の事にして北條氏九代の繁昌一時に滅亡せり又兩六波羅は足利尊氏千種頭中將忠顯赤松則村等兵を合して責亡しけり此よし追々早馬を立て、奏聞しければ主上船上を御立ありて腰輿を山陰の東にぞ催されけるかくて兵庫に御坐ありける所に新田義貞の許より相模入道以下の一族を追討して東國已に靜謐のよしを注進せり主上を始め進ら

傳 畧 御 宮 崎 金

せて諸卿一同に欣悦稱嘆せられたり此時楠正成參向す是より正成前陣を承りて畿内の勢七千餘騎を順へ前驅す六月二日内裏へ還幸なる路次の行列儀式前々の臨幸に事善りて百司の守衛殿重なり見物の貴賤街路に滿ちて帝徳を頌し奉るされは一宮は土佐の畑より妙法院の宮は讃岐より大塔の宮は志貴の毘沙門に御座ありしが將軍の宣旨を蒙り甲冑を帶し隨兵を召具して御入落ありたり建武元年十月尊氏大塔宮を譏奏しければ主上大に逆鱗まししくて兵部卿親王を召捕らせ馬場殿に押籠めらる遂に直義の方へ渡されければ鎌倉へ下し奉りて土の籠を塗りてぞ置き進らせける去る程に天下一統に歸して無事とはいへとも朝敵の余黨尙東國に在りければ第八宮を征夷大將軍となして鎌倉に置れ足利直義を執權として東國の成敗を司らせられけりか、る所に全二年七月相摸入道の次男相摸次郎時行兵を起して鎌倉へ押寄せけるにぞ直義將軍の宮を具足し奉りて落行けり此時に乘し淵邊伊賀守に下知して大塔宮を刺し殺しぬ斯て直義上落せんとて矢矧の宿に至り爰に汗馬の足を休め京都へ早馬を立て、ぞ注進しける依之諸卿議奏ありて急き宰相尊氏を討手に下さるべきに定りけり此由仰下されければ尊氏征夷將軍たらん事を乞ひ次には東八ヶ國の管領を許され軍勢の恩賞を取り行ふやうに勅裁を成し下されたとぞ乞ひける是れ天下の亂の端なりけるを申請旨

傳 畧 御 宮 崎 金

に任せて勅許ありけるこそうたてけれ但し征夷將軍の事を許されせして關東靜謐の忠に依るべしとぞ仰せ下さる依て尊氏大軍を率ひて東國に發向す相摸次郎時行是を聞きて遠江國小夜の中山箱根の水飲峠相摸川等に支へんとし路次敷か度の合戦に打負けて時行は落失せ宗徒の大名は自害し末々の者どもは皆怨敵の心を改めて足利に属しけりさてこそ尊氏か威勢自然に重くなり東國靜謐になりければ未だ宣旨をも下されざるに押し足利征夷將軍とぞ申ける東八國管領のことを勅許ありし事なればとて戦功ある輩に恩賞を行はる先立つて新田の一族共拜領したる東國の所領どもを悉く關所になして給人をぞ附られける義貞朝臣是を聞きて安からぬ事に思はれければ其代りに我分國越後上野駿河播磨などに足利の一族共知行の庄園を押へて家人共にぞ行はれける依之新田足利中悪しく國々の確執休む時なしか、りける程に尊氏隱謀の企あるよし御聞に達しければ主上逆鱗まししくて假令其忠功ありども不義を重ねば逆臣たるべし追伐の宣旨を下さるべしと御憤りありけるを親房公明顯りに諫言を上げられしとかや此時に當て尊氏は細川河波守和氏を使として奏狀を捧げぬ其文に義貞朝臣の一群を誅罰して天下を濫平に致さんと請と云ふにあり此奏狀未だ内覽にも下されざりければ遍く人の知るべきにあらき義貞朝臣早くも是を傳へ聞きて尊氏直義が八

傳 畧 御 宮 崎 金

大罪を擧げて早く逆臣尊氏直義等を誅代して天下に殉せんと乞ふとの姿状をぞ上られける
則ち諸卿参列して此事如何あるべきと詮議ありければ尊氏が八逆一々に其罪輕からせ就中
兵部卿親王を禁殺し奉る由初めて上聞に達す此一事尊氏直義等罪責遁れがたし反逆子細な
かりけりとして教慮更に穩ならせ急に討手を下さるへしとて一宮中務卿親王を東國の管領に
成し奉り新田左兵衛督義貞を大將軍に定めて國々の大名共をぞ添へられける

十四

節度使下向附り尊氏京師を犯す

建武二年十一月八日一宮中務卿親王五百餘騎にて三條河原へ打立させ給ひけるが風烈
敷して錦の御旗を指し上げたるに金銀にて打着けたる日月の御紋されて地に落ちたりけれ
ば是ぞ不吉の前兆ならんと見るもの不思議の思ひをなしけるとかや此日新田左兵衛督義貞
朝臣に朝敵追討の官旨を下されしかば其勢六萬七千餘騎にて都を立ち給ふかくて討手の大
將一宮を初め進らせて新田の軍勢三河遠江迄進みぬと聞ければ賊軍二十万七千餘騎鎌倉
を打ち立ちて三河國矢矧の東宿に着きにけり十一月廿五日大に矢矧河に戦ひ賊軍其夜鷺坂
に引き退く官軍勝に乗して鷺坂へ押寄せたりけるに鎌倉勢をも破られて立つ足もなく引

傳 畧 御 宮 崎 金

さける所へ直義の兵馳せ加りて手超に陣を取る十二月五日手超河原に戦ひ官軍速りに勝ち
賊軍大に破れてつひに鎌倉迄落ちたりけりされば官軍伊豆府にて手分けをなし竹下へは一
宮尊良親王に副將軍脇屋義助其外の軍勢七千餘騎にて向はれ箱根路へは新田義貞宗徒の一
族其勢七万余騎にて向はれたり尊氏は十八萬餘騎直義は六万余騎にて敵味方間を作り叫き
喚んで攻め戦ふ所に中書王の御勢五百餘騎錦の御旗を先に進めて押寄せければ仁木細川高
上杉抜き連れて切てかゝる官軍色めきわたりて引き漂ひたる所に副將軍脇屋右衛門佐七千
餘騎を一手になして敵の中へぞかけられける互に討つ討たれつ戦ふたりかゝりける所に大
友左近將監佐々木鹽治判官は旗を巻きて賊軍に降参し却て官軍を散々に射るさればいか
堪ふべき引退く所に尊良親王股肱の臣下と惡み思召しつる二條中將爲冬討死し給ひけり
ても箱根の合戦は官軍軍毎に利を得しかと竹の下の軍破れて寄手皆追ひ散らされぬと聞
へければ諸國の催勢路次の軍に降人に出でたる坂東勢は我先にと落行さけるにぞ大將義貞
箱根山を下り給ふ其勢百騎には過ぎざりける伊豆府を打ち通り給ふに官軍此所彼所より集
りける程に二千騎ばかりになりて木瀬川に小山判官が勢をかけ散らし其外所々に戦ひ行く
程に中黒の旗を見つけ馳せ付きて七千餘騎になり天龍川に浮橋を渡して尾張の國まで引

十五

十六
かれたりける去程に足利の一族細川定禪讃岐に起り佐々木信胤等備前に起り久下時重丹波に起り其外諸國五畿七道四國九州殘る所なく起と聞ゆしかば主上を初めまわらせて肝を消さぬ者なかりけり國々より急を告ぐる事際なかりければ新田義貞尾張國に居られけるに勅使を立て召れぬ義貞勅使に打ちつれてぞ上らるかて其年も暮れ新玉の年立かへれども内裏には朝拜もなし節會も行はれ宅家々には財寶を持運ふなど物騒しくかゝる所に尊氏八十万騎にて攻登りければ義貞軍勢の手分をなし勢田へは伯耆守長年宇治へは楠正成山崎へは脇屋義助大渡には新田義貞總大將として向はれけり建武三年正月九日尊氏八十万騎の勢にて大渡へ押し寄せ山崎へは細川定禪六萬余騎赤松範資二千余騎にて押し寄せたりければ此手の官軍防ぎ兼て山崎の陣は破れにけり新田義貞大渡を捨て都へ歸り給へは大友宇都宮は降人になりて敵に馳せ加る義貞義助一手になりて引退く所を細川定禪追懸々々て戰ふ程に義顯返し合せ火を散してを戰ひけるに鎧の袖も冑のしころも皆切落され深手あまた所負ひ半死半生になりて僅に都へ歸られけりかくて山崎大渡の陣破れぬと聞ゆければ京中の貴賤上下周章ふためき車馬東西に馳違ふ主上は三種の神器を玉體にそへて山門へ落さへ給ふはれば賊軍亂れ入りて行幸供奉の人々の屋形々々に火を懸けたれば時節風はげしく吹き布さ

て炎四方に充滿たれば猛火内裏に懸りて一時の灰燼となりけるこそ淺ましかりける事ともなれ

朝敵筑紫に走り再東上の事

主上東坂本に臨幸成りて三千の衆徒悉く甲冑を帶してぞ馳せ参りける賊軍は細川定禪三井寺に陣を取りて東坂本を攻めんと構へたり爰に奥州の國司北畠中納言顯家卿五万余騎を率いて正月十二日近江愛智河の宿に着かれしが直に觀音寺の城を攻落し湖上の船七百余艘を點じて志那濱より渡らせける顯家卿義貞朝臣評議ありて不意に三井寺へ押し寄せければ賊軍もかねて用意したる事なれば火花を散して戦ひけるが新田の勢栗生篠塚畑互理等勇を振ひ難なく木戸を破り城中へかけ入りて堂舎佛閣に火をかけをめき叫んで攻めたりければ三井寺の衆徒四國西國の兵とも猛火の中に腹を切りて伏し或は幽谷に倒れ轉び討る、もの數を知らせ我先にもぞ落行きける尊氏は三井寺に軍始まりたりと聞ゆ黒煙天に覆ひて見ゆれば急き軍勢を遣せとて三條河原に勢ぞろへしける所に四國西國の勢とも栗田口より馬煙りを立て、引きて出來りぬれば大ひに驚きたる所に新田の勢二萬三千余騎押懸け來りて賊

傳 畧 御 宮 崎 金

軍の八十萬騎と天地を響して戦ふ度毎に官軍勝せと云ふ事なし是より後京師度々の合戦に
尊氏大に敗れて丹波路をさして引き退く或は山崎を志して逃るもあり顯家親義貞朝臣十萬
余騎にて攝津國豊島河原に戦ひ連戦皆勝つ直義兵庫をさして引き退けは尊氏筑紫へ下らん
と船に乗りてぞ落失ける義貞朝臣は數萬の降人を召具して京都に歸り給へは主上山門より
還幸なりて花山院を皇居に成されたり此年二月改元ありて延元に移さる天下の吉凶必せし
も是によらぬ事ながら建武の年號は公家のために不吉なりとて改元ありしと云ふも朝
敵は兵庫を落行きて筑前國多々良濱にて菊地武俊と戦ひ打勝らしより筑紫九國の勢靡き隨
はせと云ふ者なし朝廷新田左中將義貞を山陽山陰十六ヶ國の管領として尊氏追討の宣旨を
下さる爰に播磨國に赤松入道圓心白旗が峯に城郭を構へて討手の下向を支へんとす義貞白
旗城を取り圍みて責る事五十余日に及びたりけるも城中恙なかりけり去程に尊氏直義大舉
して東上す其勢風雨の如くにして海陸并び進む義貞退き兵庫に陣を取りて此由を奏聞しけ
れば主上大に驚かせ給ひ楠正成を召されて急き兵庫へ罷下り義貞に力を合せて朝敵を防ぐ
べきよし勅命ありしかば正成五百余騎を率して兵庫に赴く五月廿五日數萬の兵船陸路の大
勢雲霞の如く兩陣互に攻め寄せて敵味方の関の聲四方に響き渡り天地も崩る、ばかりなり

傳 畧 御 宮 崎 金

官軍は元來小勢なれば命を懸じて戦ふと雖とも衆寡敵せず遂に懸けまけて楠正成は討死し
義貞丹波路を差して落行き畿に六千余騎に打成されて歸洛せられければ京中の貴賤上下色
を失ひ周章騒ぐ事限りなし主上三種の神器を先に立て東坂下へ龍駕を廻されけり此時持明
院本院新院春宮に至るまで悉く皆山門へ御幸成し進らすべき上しにて太田判官供奉仕りた
るに新院は北白河の邊より俄に御不豫の事ありとて御輿を昇き居るさせ時を移して夫より
東寺へぞ遷し巻りける尊氏大さに悦び東寺の本堂を皇居と定められたり斯くて尊氏直義山
門を攻むべしとて追手搦手五十萬騎の勢をぞさし向け、る六月七日西阪の勢三手に分かれ
て二十萬騎攻め上りけるに一宮尊良親王の副將軍と憑まれたりける千種の宰相中將忠顯卿
坊門少將正忠三百余騎にて防がれけるが一人も残らぞ討たれてけり是を見て後陣の勢暫く
支へて次第々に引退きければ寄手いよく勝に乗りて大嶽までぞ攻め上りけるか、りけ
る所に新田左中將義貞六千余騎を率して四明の嶺へ馳せ登り眞倒に懸立られけるに寄手
二十萬騎の兵水飲の南北の谷へ懸落されて人馬いやが上に落ち重りたり是より後東坂本西
坂度々合戦に及ひしも遂に寄手大に破れて逃たりけり

京都合戦春宮一宮北國御下向の事

山門數日の合戦に賊軍討る、もの數を知らせ東西の坂より追ひ立られて引退さたる兵とも京中にも尙足を留めせ落行けるが數日立ちて又賊軍大勢になり山門には京中無勢なりと聞きて六月晦日十萬余騎にて寄せたりけるが東寺より五十萬騎を出して四方八方に圍み余さしと戦ふ寄手片時か間に五百餘人討れて引返す其後又京都へ寄せられけるに野心の者ありて謀を告げたりければ敵其用意して戦ふ毎に大に苦戦して引かへされけり去程に官軍兩度の合戦に打負けて氣疲れ勢薄くなりていかなる野心の者出來らんもはかりがたしと宸機を惱ませ給ひければ諸方の手分を定められて八月十三日又々京都を攻められけり義貞朝臣先日度々の軍に討まけて此度耻辱を雪がんと出立たれければ御治世兩統の聖運も新田足利多年の憤も只今日の軍に定めぬとこそ見ぬたりけれ既に六條大宮より軍始りて入亂れ戦ふたり義貞の兵向ふ敵を懸立てく東寺の門前に押し寄せて関をとつと作る義貞今日を限りの運命と思ひ定めて敵を八方へかけ散し馬を西頭立て、討死せんとし大敵をかけ立てく揉みたりけるに雲霞の如くなる大勢に此度も打負けて義貞義助江田大館萬死を出て一生に逢ひ又坂本へぞ引き返されける此日名和長年は討死してけり京都度々の合戦に官軍打

負けて山門の衆徒も士卒の兵糧を出すに家財悉く盡きて共に飢餓に臨まんとす利へ北國の道をば足利高經が差し塞ぎて人を通させ近江の國も小笠原が湖上の船を留めければ運送の道塞りて官軍いたく困却せりかくては叶まじとて近江の敵を退治せんと戦ひけるも又打負けいよく兵糧盡きて難儀に及びけりか、りける處に尊氏より内々使者を立て奏上しける事ありければ主上僞りてはよも申さじと思され遷幸なるべきよしを仰出されたり堀口貞満此事を聞きて大に驚き義貞に告げ、れば義貞朝臣父子兄弟兵三千余騎を召具して參内せられたり主上例よりも玉顔を和らげさせ給ひて義貞義助を御前に近く召れ御涙を浮べて仰せられけるは尊氏朝家を傾けんとし義貞は其一家なるも志を義におき傾廢を助けて命を天に懸けしかば汝が一類を四海の鎮衛として天下を治めんことを思ひつるに天運時到來すして兵疲れ勢廢れぬ故に一旦尊氏に和陸の儀を謀りて時を待たん越前の國には氣比の社の神官等敦賀の津に城を構へて味方を仕るよし開ゆれば先づ彼所へ下りて北國を打臨へ重ねて大軍を起して天下の藩屏となすべしさりながら朕が京都へ出でなば義貞却りて朝敵の名を得んも知らせされば春宮に天子の位を讓りて北國へ下すべしと仰せられければ將士皆鎧の袖をぞぬらしけるかくて十月十日主上は腰輿に召されて今路を西へ遷幸なる春宮は龍蹄に召

傳 畧 御 官 崎 金

されて戸津を北へ行啓なる北國へ落られける人々には一宮中務卿親王洞院左衛門督實世同少將定世三條侍從泰季御子左少將爲次頭大夫行房子息少將行尹武士には新田左中將義貞子息越後守義顯脇屋右工門佐義助子息式部大輔義治堀口美濃守貞滿一井兵部大夫義時額田左馬助里見大膳亮大江田式部大夫島山修理亮桃井駿河守山名兵庫助千葉介貞胤宇都宮信濃將監同狩野將監河野備後守全備中守土岐出羽守一條駿河守其外都合七千余騎龍鷹の前夜を打圍み翌十一日海津鹽津に着給ふ然るに北國の習ひにて十月の初めより雪降り今年は例より寒氣早くして風交りに降る雪は甲冑にそ、ぎ士卒寒谷に道を失ひて木の下岩の陰にちりまり適火を求め得たる人は弓矢を折り燒きて薪としいまだなほ離れざる者は互に抱き付て身を暖む元より薄衣なる人瘦たる馬とも此所彼所に凍死にけり河野土居得能は三百余騎にて後陣に打ちけるが前陣の勢に追ひかくれ道を失ひ鹽津の北にて佐々木か一族と熊谷と取籠み討たんとしけるにそ相が、りにか、りて皆差違へんとしけれども馬は雪に凍れて鬪かき兵は指を堅す程の寒氣にて弓を引き得ず太刀の柄をも握り得ずして腰の刀を土につかへうつぶしに貫かれてぞ死にける千葉介貞胤は五百余騎にて打ちけるが東西くれて降る雪に道を踏み迷ひて敵の陣へぞ迷ひ出でたりける進退歩を失ひ前後の味方に離れければ一所に

傳 畧 御 官 崎 金

集りて自害せんとしけるを尾張守高經か許より使を立て、降参をす、めければ心ならずも高經が手にぞ屬しける同十三日に義貞朝臣教賀の津に着き給ひて氣比彌三郎太夫氏治三百余騎にて御迎に参し春宮一宮新田左中將父子兄弟を金ヶ崎の城へ入れ奉り自餘の軍勢をば津の在家に宿を點じて長途の勞れをぞ休めける

按するに此時海津鹽津に着き給ひて七里半の山中をば尾張守高經が大勢にて差し懸きければ是より道を替へて木目峠を越ぬ給ふと諸書に見ゆれどもさして落着せ給ふべきは教賀の津にて道を替へても木目峠とは方角いたく違へりされば思ふに新田氏の勢は春宮一宮を供奉し海津より山中を経て御艱難の末やうくに教賀の津へは着せ給ひしならん而して河野土居得能千葉介等鹽津よりして道を踏み迷ひ木目峠へもか、りて進退を失ひしにもあらんはかむがへさだめて云ふべき事もありぬべし

廬山城主瓜生判官心替の事

新田左中將義貞朝臣は春宮一宮に附進らせて金崎の城にをり子息越後守義顯に北國の勢二千餘騎を副へて越後國へ下ざる脇屋右衛門佐義助には千餘騎を副へて瓜生判官が廬山の城

傳 畧 御 官 崎 金

へつかりさる瓜生判官保舍弟兵庫助重輝正左衛門照兄弟三人種々の酒肴を昇せて鱒波の宿へ参向す此外人夫五六百人に兵糧を持たせて諸軍勢に下知し毎事に是を一大事とぞ沙汰しけるは誠に他事もなげにそ見ゆる斯る所に足利高経が方より潜に使者を立て義貞が一類を追罰すべきよし前帝(主上の御事爰にては前帝といふ)よりなされたりとて繪旨をぞ送りける瓜生判官是を見て忽ちに心替りして柚山の城へ取り上り關を閉ぢてぞわたりける爰に判官が弟に義繼房と云ふ禪僧ありて申しけるは兄の保は尊氏が謀略に陥りしこそ口惜し去なから事の様を承り遂には味方に参じ申べく願くは御公達一人を是に留め置かれたし義繼房いかにもして隠し置き時を得ば御旗を擧げて金崎の後攻を仕るべしと兩眼より涙をこぼし申ければ兩大将も是が氣色を見給ひて疑の心なく御心中たのもしとて脇屋殿の子息式部大輔義治とて今年十四歳になり給ひけるを義繼房にぞ預けらる是より右衛門佐は金崎へ歸り越後守は越後國へ下らんとて宿中に勢を揃へ給ふに瓜生が心替を聞きていつの間にか落行けん軍勢纒に二百五十騎になりけり此勢にては越後國までは何として下らるべき共に金崎へ引き返さんとて打ち連れて又教賀へぞ歸り給ひける爰に當國の住人今庄九郎入道淨慶要害に逆木を引鐵をそへて待ちかけたる義助朝臣是を見給ひて是は今庄法眼久經と云ひ

傳 畧 御 官 崎 金

し者當手に屬して坂本にありしが其一族にやあらん事の様を尋ね聞けよと由良越前守光氏を遣はされければ今庄淨慶答ふるに父法眼久經は御手に屬したりしも淨慶今は尾張守高経が手に屬して此所をば通じがたし是全く本意にはあらねど此所を支へせしめては其罪逃れかたし故に一矢仕るべしされば名ある人々を一兩人出されなば其首を取りて合戦したる塵に供へて身の咎を免れんと申ければ光氏歸りて其由を申けるに義助義顯兩大将淨慶が申す所理りなきにならねども士卒の志親子よりも重くして我等は士卒に替るども我命に士卒をば替へがたしと申されければ光氏再應問答しけるも淨慶は尙心とけせ數刻を移しけり光氏さらば天下の爲主の御命に替らんと腰の刀を抜き腹を切らんとしけるを淨慶走り寄り押どめ光氏が刀に取りつきて忠義の程を感じつゝ、月を伏せ逆木を引き退けてぞ通しける
按するに瓜生保が心がはりは私ならぬ事とぞ知られける義助義顯鱒波に打越ぬ給ふやいと参向して誠に他事なかりしも義貞が一族追罰すべきよし繪旨をなされたりしを見てさては新田の一族は勳勳を蒙りし者よと心得て己が館には引籠りぬ主上山門より還幸成りし時に逆臣尊氏が神器を新主に傳へられんことを乞ひければ偽器を以てせられしと見ゆ此時乞ふがまゝに繪旨も下されしならん瓜生は新田足利二氏の争ひを見て動くにあら

傳 畧 御 宮 崎 金

二十あ
せと心を決せしもの如し後に至りて檢旨の眞ならずりしを悟り戦兵を擧げて大に賊軍を破り金ヶ崎の後攻をなせしも寒露に支へられ進退極りて遂に討死しけるこそ口惜しけれ當時國軍の旗色を見て昨日の味方は今日の敵と反覆常なかりし賊兵等も同一視すべきにあらざるなり

十六騎の勢金ヶ崎入城附り船遊の事

今庄淨慶も問答の難儀なりしを聞きて金崎へ通らん事叶はじと思ひて二百五十騎の軍勢何地ともなく落失せ繞に十六騎となり深山寺の邊にて樵夫に行合ひたるに金崎の様を問ひければ昨日の朝より國々の勢二三萬騎にて城を百重千重に取り巻きて攻めけるよしさてはいかすべき爰にて腹を切るやと陣隙しける所に栗生左衛門顯友が策を用ひて此夜は山中に忍び十六人が鉢巻と上帯とを解きて青竹に結びつけ旗の様に見せて此所の木の梢彼所の陰に立て置き明るるを避じと待ちけるに雪よりしらひ山の端に積雲漸く引き渡りければ十六騎の人々中黒の旗二旗差し擧げ深山寺の木陰より敵陣の後へかけ出まへ瓜生、富盛、野原、井原、豊原、手泉寺、御白山の衆徒が後攻するぞ城中の人々出向はれよかしと聲をたげ

傳 畧 御 宮 崎 金

きて関をど揚げたりける其前にすゝみし武田五郎は京都の合戦に右の指を切られたりしが未達せして太刀のつかを握るべき様もなかりければ木太刀を作りて右の腕に結びつけたる二番に遮みたる栗生左衛門は帶副の太刀なかりけるに深山柏を一丈余に打ち切りて金才棒の如くに見せ右の小脇にかい挟みて大勢の中へぞわりて入る是を見て金崎を取巻きたる寄手三万餘騎すはや相山より後攻の勢懸けるぞとてあわてさわく此時深山寺に立并べたる旗とも木々の嵐に翻るを見て後攻の勢大勢なりと心得て攻口にありける若狭近江の勢も橋を捨て弓矢を忘れてさつと引さければ城中の勢八百余人是に利を得て濱面の西大島居の前へ打ち出でたかけるにぞ雲霞の如くに充滿したる大勢とも八方へ逃げ散る或は跡に引くを敵の追ふと心得て返し合せては同士打をし或は逃けるを敵と見て立留りては腹を切るもあり二里三里が外にも猶止まらぬ誰か追ふともしもなきに遠引して皆己が國々へぞ歸りける去程に百重千重に城を圍みたりつる敵とも一時の謀計に破られて近邊に今は敵と云ふ者一人もなかりければ城中の人々悦びあへる事限りなし十月廿日江山雲晴れて海上波靜なりければ逆旅の御心をも慰めんために浦々の船を點せられ龍頭鷲首に准へて雪中の景をば興せさせ給ひける春宮は御理尋一宮は笙の役洞院左衛門督實世轉は琴の役義貞朝臣は横笛

傳 畧 御 宮 崎 金

義助朝臣は等の笛維頼は打物にて蘇合香の三帖萬壽樂の破繁絃瑟管の聲一唱三嘆の調融々
泔々として正始の音にかなひしかば天人も爰に天降り龍神も納受する程なり春宮御盃を
傾けさせ給ひける時島寺の袖といひける遊君御酌に立ちたりけるが拍子を打ちて翠帳紅圍
萬事之禮法雖異舟中波上一生之歡會是同と歌ひたがければ叙感な、めならせ武將官軍も
齊く嗚咽の袖をぬらされける

按るに濱面の西大島居の前とあるは氣比神社今の裏島居の方なるべし氣比神社むかし
は金が崎の方正面なりしといふ當時は天筒山の麓まで砂濱にて浪の打寄する事もありし
ならん島寺は今の大島町此邊に遊廓ありしと知られり又深山寺は敦賀の津より東の方一
里ばかりの所なりけり

金ヶ崎城合戦の事

金崎の寄手四方に退散しけるよし京都へ聞ひければ畠氏大に怒りて諸國に下知し大勢をぞ
差向けらる尾張守高經を北陸道の勢五千余騎を卒して蕪木(蕪木は今の赤崎浦なるべし南後郡に蕪
木の浦と云ふれどもそれにはあらし)
より仁木伊賀守頼章を丹波美作の勢千余騎を卒して鹽津より今河駿河守と但馬若狭の勢七

傳 畧 御 宮 崎 金

百余騎を卒して小濱より荒河參河守は丹後の勢八百余騎を卒して正田より細川源藏人は四
國の勢二萬余騎を卒して東近江より高越後守師泰は美濃尾張遠江の勢六千余騎を卒して荒
血山中より小笠原信濃守は信濃の勢五千余騎を卒して新道より向ふ佐々木鹽治判官高貞は
出雲伯耆の勢三千余騎兵船五百余艘に取り乗りて海上よりぞ向ひける其勢都合六萬余騎山
には役所を作り雙べ海には船筏を組みて城の四方際透間もなかりけり抑金ヶ崎の城は三方
海に依りて岸高く巖滑なり巽の方に當れる山(天筒山なるべし)一つ城より少し高くして
寄手城中を目の下に見下すといへとも岸絶地僻にして近づき寄れば城郭一片の雲の上に
崎ち遠くして射れば其矢萬仞の谷底に落つされば如何なる巧を出して攻むとも功岸の邊ま
でも近付くべき様はなかりけりかくて城中小勢なりといへともしかも新田の名將一族を盡
して籠られけり寄手大勢なりと雖へとも矢に當りて疵を病み石に打れて骨を砕くもの毎日
千人二千人に及べとも逆木一本をだにも破られぞ是を見て小笠原信濃守貞宗究竟の兵八百
人を勝りて東の山の麓より巽角の死を直達にかつき連れてぞ揚げたりける城にはこ、や破
らるべき所なりけん城中の兵三百余人二つの關を開きて同時に打て出たり兩方相近になり
たりければ打物にて戦ふ防く兵はさすがに小勢なれば戦疲れて見ゆる所に例の栗生左衛

傳 畧 御 官 崎 金

門前威の鎧に龍頭の背を夕日に曬して五尺三寸の太刀をはき櫓の棒の八角に削りたる長一丈二三尺もあるを打振りて大勢の中へ走りかゝり片手打に二三十重打に打ちたがける寄手の兵四五十人犬居にとうと打ち居らるれ中天にうんと打撃けられ沙の上に倒れ伏す後陣の勢を見ずしてろになりて浪打際に群立所へ氣比の大官司太郎大學助矢島七郎赤松太田の師法眼四人透間もなく打て懸りければ叶はじと思ひけん小笠原が兵一度にはつと引きて本の陣へを歸りける今河駿河守頼貞此日の合戦を見て推量するに此所が破られぬべき所なれば城中より爰を先途と出て戦ふたり陸地より寄せばこそ足立思しく頼敵に拂はれたれ船より一責め攻めて見よと小舟百余艘に取乗りて濱際よりぞ上りける寄ると均しく切岸の下なる鹿垣一重引き破りて纏て出野の下に着かんとしける所に又城より二百余人援連れて打出てたりければ寄手五百余人真逆に巻き落され我先にと船にぞ込み乗りける此時賊軍に中村六郎と云ふ者捕手を負ひて船に乗り後れ磯陰なる小松の陰にて助けを呼びしかども皆見捨て逃行ししを野中八郎貞國と云ひける者は船を見て船を漕ぎ戻し助け乗せてぞ引けるは敵も味方もあつばれ剛の者かなど譽ぬ人ぞなかりける是より後は寄手の大勢攻め加して徒に矢軍ばかりにぞ日をもちしける

傳 畧 御 官 崎 金

瓜生判官旗を擧ぐる事
去程に瓜生判官保は足利尾張守高經の手に属して金崎の費口にありけるが其弟兵庫助重輝正左衛門照義鑑房三人は柳山の城にありて先づ頃義鑑房が隠し置たりも脇屋左衛門佐の子息式部大輔義治を大将として義兵を擧げんと日々夜々に巧みけるを聞きて若し應忽に謀叛を發さば我存せぬことはあぢじとて討れぬべければ兄弟一になりてこそ兎も角もなりぬべけれど陣屋を襲へて居たりける宇都宮美濃將監天野民部大輔とも心を合せ柳山へ歸りて旗を擧げんと評定しける所に諸國の軍勢とも眼をも乞はき己が所領へ振々に歸りけるを押し留んために高越後守四方の口々に堅く兵士を居へて人を通さそ若し所用ありて此道を通る人は師泰が判形を取りてぞ通りける瓜生判官さらば此關を謀りて通らんと馬の大豆を運ぶ爲に人夫百五十人を柳山へ遣すべしと判形を乞ひ受けて文字を削り三百人と書き直し宇都宮天野相共に深山寺の關所を事故なく通りけり瓜生判官柳山に歸りければ三人の弟とも大に悦びて十一月八日飽和の社の前にて式部大輔義治を大将として中黒の旗を擧ぐる程に去ぬる十月坂本より落ち下りける軍勢此所彼所に隠れ居たりけるが此事を聞きて何時の間にが馳せ來りけん程なく千余騎に成にければ其勢を五百余騎差し分けて鶴遊の宿場處の峠

傳 畧 御 宮 崎 金

に國を居て北陸道を差しふくむ越後守師泰此よしを聞きて若し延引せば白山の衆徒等
敵に加りて由々敷大事なるべしと加賀能登越中三ヶ國の勢六千余騎を柳山へ差し向ける
瓜生是を聞きて敵の陣を要害に取らせしと新道(新保ならん)今庄栗原宅其三尾河内四五里
が間の在家を一字も残らず焼き拂ひて湯尾の宿ばかりを残し置きたり十一月廿三日寄手六
千余騎深雪に橋をもかけき山路八里を一日に越えて湯尾の宿にぞ着きたりける是より柳山
へは五十町を隔て、其際に大河あり日暮れて道に歩み疲れければ軍は昨日と僅なる在家に
つまり居て火を燒き身を温めぞ寝たりける瓜生はかねて案の圖に敵を谷底におびき入れ
て其夜の夜半ばかりに野伏三千人を後の山へあげ足輕の兵七百余人を左右へ差し廻して関
をぞ揚げたりける寝をびれたる寄手共関の扉に驚きて周章翔く所へ宇都宮紀清両黨亂れ入
りて家々に火をかけたれば物具したる者は太刀を取らせ弓を持ちたる者は矢を觸れき五尺餘
り積りたる雪の上に橋をもかけせして走り出たれば生虜らる、者三百余人討たる、者は
數を知らせ希有にして逃げ越びたる人も皆物具を捨て弓矢を失はぬ者はなかりけりか、か
ける程に足利尾張守高經三千余騎を卒して十一月廿八日蕪木浦より越前府(今の武生なり)に
へ歸りければ瓜生此事を聞きて驚き足をとめさせしと全廿九日に三千餘騎にて押し寄せし

傳 畧 御 宮 崎 金

日一夜攻め戦ひて高經が權籠りたる新善光寺の城を攻め落す此時又討たる、者三百余人生
虜百三十人が首を刎ねて帆山河原に懸け並ぶ夫より式部太輔義治勢漸く盛なりければ平泉
寺野原の衆徒當國他國の地頭御家人引出物を捧げ酒肴を昇せて日々に群集しけれども義治
不興氣にのみ見なければ義鑑房御前に近づきて是程めでたき砌になど勇みけなる御氣色も
候はぬやと申しければ義治申されけるは味方兩度の軍に打勝ちて悦ぶべき所なれども春宮
を始め進らせて當家の人々金崎の城に取籠められれば兵糧にもつまり戦にも苦みて御座
すらんと想像しつ、酒宴に臨めども樂む心も候はせと宣へば義鑑房畏りて其事は御心安く
思召めされかし此間は餘りに吹雪烈しく長途の歩立難儀にて天氣の少し晴る、ほどを相待
ち後攻を仕るべきよし申上げて感涙にむせびながら大將の御前をぞ立ちけるさらば馳て金
崎の後攻をすべしと兵を築めてはと雪の降らぬ日を相待ちけるもけふぞとて門出すべき
日和はなかけり

主上吉野(潜幸)の事

却説王上は山門より遷幸なりしかとも元來尊氏が謀計なりしかば直に花山院の故宮に押籠

傳畧御宮崎金

められさせ給ひて供奉の人々は禁殺せられぬれば一人も参り仕ふる人なかりける所に刑部大輔景繁武家の許を得て只一人伺候したりけるが勾當の内侍を以て潛に参問しけるは越前金崎の合戦に寄手毎度打ち負け、るにぞ加賀國鈿向山の衆徒等味方に参り富樫介が籠りたる那多の城を賣め落して金崎の後攻をせんと企てけるよし是を聞きて菊池肥後守武重日吉加賀法眼已下皆己が國々へ逃げ下り義兵を擧げて國中を打ち順へければ天下の反覆遠からじとこそ存し候へ急ぎ夜に紛れて大和の方へ臨幸成りて吉野十津川の邊に皇居を定められ諸國へ倫旨を成し下されかしと委細に申し入れたりけり主上具に聞召されさては天下の武士なほ帝徳を慕ふ者多かりけりと思召されければ明夜必き寮の御馬を用意して相待つべしとぞ仰出されける十二月廿一日の夜築地の崩れより忍び出させ給ふに景繁かねてより用意したる事なれば主上をば寮の御馬に昇り乗せ進らせて三種の神器を自ら荷擔して大和國賀名生といふ所へぞ落ち着せ給ひける斯て景繁吉野の大衆を語らひければ當寺の宿老吉水の法印暫くも猶豫あるべからせとて若大衆三百余人皆甲冑を帶して御迎にぞ参りける此外楠帶刀正行、和田次郎、具木定觀、三輪西阿、紀伊國には恩地、牲河、貴志、湯淺、五百騎三百騎引とも切らせ馳せ参りけるにぞ聖運忽に開けぬと人皆歡喜の思ひをなしけりしか

傳畧御宮崎金

るに金崎の城には出入絶へたるに依りてかくと知る人もなかりける所に正月二日の朝暖に楠川の島崎より金崎をさして遊く者あり海松和布を被く海士人か浪に漂ふ水鳥かど目をつけて是を見ればそれにはあらせして直理新左衛門といひける者吉野の帝よりなされたる倫旨を譬に結びつけて遊ぐにぞありける城中の人々驚きて急ぎ開き見るに主上潛に吉野へ臨幸なりて近國の士卒悉く馳せ参る間不日に京都を攻めらるべきよし賊せられたりしかば春宮一宮は申までもなく義貞朝臣其外の將士も悦びあへることかぎりなし

按るに楠川の島崎とは金ヶ崎より西一里余にして楠川村あり其山峽の突出したる所にいとこの地藏といふあり其邊なるべし陸地は敵の充滿したれば海上一里余をおよぎ渡りて金崎城に入りし事は是ともしるき當時致賀の湊といふは今の結城川崎松榮當りにして其余は海中にてありしならんといへり

金崎後攻の勢敗軍の事

延元二年正月十一日雪晴れ風止みて天氣少し長閑なりければ柏山より金崎の後攻をせんとし里見伊賀守時成を大將として五千余人其勢皆吹雪の用意をして物具の上に蓑笠を着附込の

傳畧御宮崎金

上うへに橋はしを履ふみて山路八里が間の雪踏ゆきふみみ分けて其日葉原はばらまで寄せたりける高越後守かねて用意したる事なれば今河駿河守を大將として敦賀より二十余町東に當りて究竟くわうきやうの要害やうがい(越坂の峠なるべし二里余あり)ありける所に播磨はりまか、せて待ちかけたり先づ一番に宇都宮紀清うつみやのきよ両黨三百余人押寄せて坂中なる敵千余人を遙はるかなる峯へまくり上げて懸かて二陣の敵にか、らんとしけるが両方の峯なる大勢に射立られ北の峯へ引き退き二番に瓜生天野齋藤小野寺七百余騎鋒はこを調へて上りけるに駿河守か堅めたる陣を三ヶ所追ひ破られはつと引きける所へ越後守が勢三千餘人荒手代りて相戦ふ瓜生小野寺が勢又追立られ宇都宮と一にならんと傍なる峯へ引き上りけるを里見伊賀守僅ゆづの勢にて横合よこあひに進まれたり敵是を大將よと見てければ自餘よりのの葉武者はむしやにはか、らまおつ取籠めて討たんとしけるを瓜生と義鑑房よしかんぼうと屹まと見て我等が愛にて討死せでは味方の勢は助るるまじき所ぞと只二人打ちか、り敵の中へ破りて入らんするを見るに判官が弟林次郎入道源琳同舍弟兵庫助重輝正左衛門照三人遙に落ち延びたりけるが是を見て茲に討死せんと取りて返しけるを義鑑房屍目に睨にらみて日來言ひし事をば何時の程に忘れけるぞ我等二人討死したらんは一旦の負け兄弟残なく死したらば永代の負にてあらん思ひ籠むる心のなきぞいひ甲斐なしと荒ら、かに申しけるに三人の者とも思ひ

傳畧御宮崎金

返して少し猶豫うやうやしける間大勢の敵に中を押し隔てられ里見瓜生義鑑房三人は一所にて討れけり葉原より深雪ふかゆきを分けて入替る勢もなく戦ひ疲れてければ返さんとするに力盡ちからつき引かんとするに足たゆみぬされば此所彼所に引き延びて腹を切る者數を知らず適落たふさち延びたる兵も弓矢物具を棄てぬはなし敗軍の兵とも柚山へ歸りければ手負死人の數をしるすに里見伊賀守瓜生兄弟甥の七郎が外討死する者五十三人疵きずを被る者五百餘人なり子は父に別れ弟は兄に後れて啼哭いなきする聲家々に充滿じゅうまんたりされども瓜生判官が老母の尼公ありけるが大將義治の前に參りて此度敦賀へ向ひし者ともか不覺ふかくにて里見殿を討せ進らせて御心中の程推量おしはかり進らせぬ但し是を見ながら判官兄弟いつれも恙やまなくして歸りなば如何に今一入うたてさも遣る方なかるべきに判官が伯父甥三人の者里見殿の御供申し殘の弟三人は大將の御爲に活き残りてあれば歎なげの中なかの悦よろこびなり元來上の御ために此一大事を思ひ立ちし上は百千の甥子どもが討れしとて歎くべきにあらまど涙を流して申しつ、自ら酌しやくを取りて一獻いっけんを進め奉りければ機を失へる軍勢も別れを歎く者共も愁うれを忘れて勇をなす尼公の忠節ちゆうせつまた感あるに餘りありけり

按あざるに柚山より後攻の勢山路八里を越こへて葉原まで寄せたりと此間に所謂木の目峠あり

り北陸道第一の難所なり殊に積雪丈餘に及びし事知るべし重鎧を着て其艱難の程も知られけり賊軍は越坂の嶮岨に依りて防ぎしならん此所誠に究竟の要害なりゆゑにはげしく戦ひしは葉原と越坂の間なるべし里見瓜生義隆房三人討死せしも此所と知られたりされとも三人の墓は極曲の山にありそは首級を取歸りて埋葬せしならんか、る忠臣の墓も今は苔に埋れて知る人だになきはいとなげかはしき事にこそ

金城落城一宮薨御事

金崎の城には柚山より瓜生が後攻をこそ待れしが判官打負けて軍勢若干討れぬと聞ぬれば恐む方なくなりて日々に兵糧乏しくなりければ或は江魚を釣りて飢を助け或は磯菜を取らて日を過すなど暫しが程こそかやうのものに命を續きて軍をもしけれ餘に事迫りければ諸大將の立られたる秘藏の名馬どもを毎日貳匹ッ、いさし殺して各是をぞ朝夕の食には與へたりけるされば後攻する者なくては此城今日とも堪へがたしと思はれければ新田左中將義貞脇屋右衛門佐義助洞院左衛門督實世河島左近藏人惟頼を案内者にて上下七人二月五日の夜半ばかりに城を忍び抜け出、柚山へぞ落着かれける瓜生字都宮斜ならせ悦びて今

傳畧御宮崎金

一度金崎へ向ひて城中の思ひを蘇せしめんとさまぐ思案を廻らしけれとも國々の勢寄手に加りて兵十萬騎に餘れり柚山の勢は僅に五百余人馬物具もはかぐしからねば兎やせん角やせんと身を揉みて二十日余を過しける程に金崎には早や馬どもを皆喰ひ盡して食事を斷つ事十日ばかりになりければ軍勢共も今は手足も働かぬなりにけりか、りける所に三月六日の卯の刻に大手搦手十萬餘騎同時に切岸の下崩際にぞつきたりける城中の兵どもは是を防かんために木戸の邊までよるめき出でたれども太刀を仕ふべき力もなく弓を引くべき様もなければ只いたづらに櫓の上に登り崩の陰に集りて息つき居たるばかりなり寄手ども此有様を見てさればこそ城兵は弱りてけれ日の中に攻め落さんとして亂抗逆木を引き退け崩を打破りて三重拵へたる二の木戸までぞ攻め入りける由良新左衛門長濱彈止二人斬出義顯の前に參じて申しけるは城中の兵ども數日の勞れに依りて今は矢一つをもはかぐしき仕り得せして敵既に一二の木戸を破りて攻め近づきければ如何にもして春宮をは落し進らせ自餘の人々は御自害あるべし其間は我等相支へ申すべし見苦しきものをば皆海へ入れさせられよと申して御前を立ちけるが餘りに疲れて足も立ざりければ二の木戸の脇に射殺され伏したる死人の股の肉を切りて二十余人の兵ども一口づ、喰ひて是を力にしてぞ戦ひける

傳畧御宮崎金

傳 畧 御 宮 崎 金

河野備後守は鬪手より攻め入る敵を支へて半時ばかり戦ひしが今ははや精力盡きて深手數多負ひければ攻口を一足も引かず三十二人腹掻切りて同枕にぞ伏したりける新田越後守頼顯は一宮の御前に参りて合戦の機今は是までと覺候我等与箭の名を惜む家にて自害仕べく上様の御事はたとひ敵の中へ御出ありとも失ひ進らするまでの事はよも有まし只かやうにて御座あるべしと申されければ一宮打笑ませ給ひて主上都へ還幸成りし時我以爲元首將以汝令爲股肱臣一夫無股肱元首持與を得んやされば吾命を白刃の上に縮めて怨を黄泉の下に酬はんと思ふなり抑自害をば如何様にしてよきものと仰せられければ義顯感涙を押へてかやうに仕ると申しもはて是刀を抜きて逆手に取り直し左の脇に突き立て、右の脇のあばら骨二三枚懸けて抜き破り其刀を抜きて宮の御前にさし置きうづふしになりてぞ死にける一宮雖て其刀を召され御覽せむに柄口に血餘りすべりければ此次の袖にて刀の柄をさりと押し卷せ給ひて雪の如くなる御膚を顯し御心の邊に突き立て義顯が枕の上に伏させ給ふ頭大夫行房里見大炊助時義武田與一氣比彌三郎大夫氏治大田帥法眼以下御前に候ひけるがいざさらば宮の御供仕らんとて一度に皆腹を切る是を見て庭上に並居たる兵三百餘人互に差違へ〜いやか上に重り伏す氣比大宮司太郎は元來力人に勝れて水練さへ

傳 畧 御 宮 崎 金

遠者なりければ春宮を小舟に乗せ進らせて櫓かきもなければ綱手を己が横手綱に結びつけ海上三十余町を遊ぎて蕪木浦へぞ着け進らせける是を知る人更になかりければ浦に柚山へ入れ進らせんことは安かりなんさるに一宮を始め進らせて城中の人々残らぞ自害する所に我一人逃げて命を活たらば諸人の物突なるべしと思ひてや春宮を怪しげなる浦人の家に預け置き進らせは日本國の主に成らせ給ふべき御方にて渡らせ給ふぞ如何にもして柚山の城へ入れ進らせくれよと申し合めて蕪木の浦より取りて返し本の海を遊ぎ歸りて彌三郎大夫が自害して伏したる其上に自ら我首を掻き落して片手に提げ大膽脱になりて死にけり土岐阿波守栗生左衛門矢島七郎三人は一所にて腹切らんと岩の上に立並びて居たりけるが船田長門守來りて總大將兄弟柚山にあれば我等一人も活き残りてこそ忠功なれいざ隠れて見んと申しけるにぞ三人の者とも船田が跡に附きて磯打つ波際に當りて大に穿けたる岩穴ありけるを究竟の隠れ所と四人共に穴の中に隠れて三日三夜を過しける由長長濱は皆人々の自害してはてんまでと戦ひけるを安間六郎左衛門走り來りて大將は早や御自害ありしぞと申しければいざさらばとて死する命を寄手の大將に近寄りて差違んと五十余人の兵とも三の木戸を同時に打出で一方の寄手三千余人を追ひまくり其敵に交りて高越後守が陣へぞ近

傳畧御宮崎金

つぎけるいかに必ばかりは彌武に思へとも城より打ち出たる者どもをば管入是を見て押し隔てけるにぞ一人も残りなく皆討れにけり都て城中に籠り居たる所の勢は百六十余人其中に降人になりて出る者十二人岩穴の中に隠れたる者四人其外百五十一人一時に自害して戦場の上とはなりけり之れ實に延元二年三月六日の事にして今より五百五十余年の古しへなり明治の大御代となりて今度此所に宮柱太しく立て、金崎宮と崇め奉り官幣中社に列せらる御神靈は則ちたふとも此一宮尊良親王にぞおはしましける。
附り金崎落城の後には討死したる怨靈とも此所に留りて月疊り雨暗き夜は叫喚求食の聲歌歌として人の毛孔を寒からしむされは數年の後松島永建禪寺の開祖某和尚が壇を設けて數日經を誦し靈魂を吊ひしかば其後怪異なきにいたりしとなんいひつたふ

春宮並將軍宮御隠れ事

金崎落城の翌朝藤木浦より春宮御座のよし告げたりければ島津駿河守忠治を御迎に遣して取り奉る金ヶ崎にては討死自害の首百五十一取り並べて實檢するに新田の一族には越後守義顯里見大炊之助時義(或は義氏ともあり何れか足なるや)の首ばかりありて義貞義助の首はなかりさされば

傳畧御宮崎金

其邊海の底までさがしけれども見ぬざりければ足利高經春宮の御前に参りて義貞義助二人が死骸はいかになりしやと問奉りければ春宮御幼稚(此時御年十三)なる御心にも彼人に袖山にありと知らせなばあしかりなんと思召され義貞義助二人昨日の暮程に自害したりしを手の者とも火葬にすこそ申しつれと仰せられければさては死骸なきも道理なりけりとして新田越後守義顯并に一族三人其外宗徒の首七を持せ春宮をば張興に乗せ進らせて京都へ還し上せ奉る義顯の首をば朝敵の棟梁(朝敵とは北朝に對していふ)義貞の長男なればとて大路を渡して獄門に懸けしとなん足利二兄が爲す事憎むにも猶あまりありけりかくて春宮京都へ還御成りければ馳て櫻の御所を拵へて押し籠め奉りぬ一宮の御首をば禪林寺の長老夢窓國師の方へ送り奉りて御喪禮の儀式を取行ひけりさて新田左中將義貞朝臣脇屋右衛門佐義助は金が崎没落の後柚山の瓜生が館に居られけるが所々に隠れ居たる敗軍の兵を集めて國中へ打ち出で吉野に御座ある主上の宸襟を休め奉り金崎にて討れし亡魂の恨をば散せばやと潜に國々へ使を通して舊功の靈をあつめられけるに在々所々の兵共聞傳へく馳せ集りける程に忽ち三千余騎になりける去程にあら玉の年立かへりて延元三年二月足利尾張守が相籠れる府中(今の武生なり)の城を攻め落し其外諸所の合戦に官軍皆大ひに打勝ち

傳 畧 御 宮 崎 金

て此日國中の城を攻落す事同時に七十三ヶ所なり高経は織田大森を打過ぎて足羽の城へぞ
逃げ入りける此外諸國の宮方蜂起して大館左馬助氏明は伊豫に起り四國を打ち従へんとす
江田兵部大輔行義も丹波國に馳せ來りて足立本庄等を語らひ高山寺に楯籠る金谷治部大輔
經氏播磨國丹生山に城郭を構へ山陰の中道をさし塞ぐ遠江井伊介は妙法院宮(宗良親王)を
取り立進らせて奥の山に楯籠る宇都宮治部大輔は紀濟兩黨五百餘騎を卒して吉野へ馳せ參
る此外此所彼所より起ると聞取ければ尊氏直義大に忿りて此事は偏に春宮の義貞等が金が
崎にて腹を切りたりと宣ひしをまことと心得へ相山へ討手を下す事の延引せしよりかゝる
事こそ出來たれ此宮是程までに當家を失はんと思召しけるを徒に置き奉らばいかなる御企
あらんも知れ老鳩毒を進らせて失ひ奉れと栗飯原下總守氏光に下知しけり春宮は連枝の御
兄弟將軍の宮(成良親王)と申奉りて直義が先年鎌倉へ申し下し參らせたりし第七宮と一所
に押し籠るの奉りて御座ありける所へ氏光薬を持參りていつとなくかやうに打ち籠りて御座
あれは御病氣なんと萌す御事もやあらんとて三條殿より調進せられたれば毎朝一七日聞召
されよかしと御前にぞ差置さける氏光罷歸りて後將軍の宮此薬を御覽せられて未病の見ゆ
さる先にかねて療治を加ふる程に我等を憐み思は、此一室の中に押し籠めて朝暮物を思は

傳 畧 御 宮 崎 金

すべしやは是は定めて毒なるべしとて庭へ打捨てんとし給ひけるを春宮御手に取らせ給ひて
尊氏直義等此程に情なき所存を捕むものならば假令此薬をのまそとも遁るべき命かは是元
來希ふ所なり此毒を呑み世をはやうせばやと思ふなり命を鳩毒のために縮めて後生善所の
望を達せんにはしがじと仰せられて毎日法華經一部あそばされ念佛唱させ給ひて此鳩毒を
ぞ聞召されける將軍の宮是を御覽じて斯る憂き世に心を留むへきにあらせ同じくは御供申
さんこそ本意なれとて諸共に此毒薬を七日までぞ聞召しける聽て春宮は其翌日より御心地
例に違はせ給ひけるが御終焉の儀關にして延元三年四月十三日の暮程に隠れさせ給ひけり
將軍宮は廿日余まで御座ありけるが黄疽といふ御いたはり出で來て御遍身黃にならせ給ひ
て終にはかなくならせ給ふ春宮恒良親王則ち金崎宮一宮尊良親王と相殿に鎮座まし、け
る其古しへを思へはいともかしこき事ともなりけり
謹で古史を按ずるに
春宮恒良親王殿下は後醍醐天皇の第九宮にあたらせ給ひて建武元年正月廿四日皇太子に
立せ給ふ延元元年十月主上山門より京都へ還幸成りし時皇太子に天子の御位を譲り給ひ
て北國へ下されしと見ゆれば其時神器をも御傳へあらせられしならんさればかしこくも

一天萬乘の至尊に御座しまして金ヶ崎城はすなはち皇居なりされともみだれたる世の中にしあれば當時の深き教慮に出でし事とも今よりかながへ知るべきにあらざるなり
尊良親王殿下は全帝の第一宮に御座し、かば春宮に立せ給ふべかりしを教慮にも叶はさせられ後二條院の第一の御子邦仁親王關東の計らひとして此時春宮に立たせ給ひしなり武家の専横も甚しといひつべしか、りければにや元弘の亂も出来にけり憎むにもまたあまりあるは北條足利二氏が専横なり歎きてもなほあまりあるは兩親王殿下の御不運にぞありける實にそのかみ皇室の尊嚴なるを知らざるもの、如し皇運のめぐらさるし事を今より想像し奉るも豈慨歎の至りならぞや

傳畧御宮崎金

一宮御息所の事

爰にいと哀れなる物語こそわりけり一宮の御首をば禪林寺の長老夢窓國師の方へ送られ御喪禮の儀式を引さ繕はるさても御匣殿の御歎中は申すもかろかなり此御匣殿の一宮に参り初め給ひし古の御心づくし世に類なき事とぞ聞ゆし一宮尊良親王已に初冠めされて深宮の内長らせ給ひし後御才學もいみじく容貌も世に勝れて御座せしかば春宮に立せ給ひなん

傳畧御宮崎金

と世の入時めと逢へりしに關東のはからひとして慮の外に後二條院の第一の御子春宮に立せ給ひしかは一宮に参り仕ふ人々も皆望を失ひ宮も世中萬打ち凋れたる御心地して朝暮は只詩歌に御心を寄せ風月に思を凝しめ給ふ折節につけたる御遊などあれとも差して興せさせ給ふこともなし只一人のみ年月を送らせ給ひけるに或時關白左大臣の家にて生上建部殿上人數多集りて繪合のありたるに洞院の左大将の出されたりける繪に源氏の優婆塞の宮の御女少し眞木柱に居隠れて琵琶を調へ給ひしに雲隠れしたる月の俄にいとあかく指出でたれば扇ならでも招くべかりけりとて撥をあげてさしのぞきたる顔つさいみじくうたけにてにはやかなる氣色いふばかりなく筆を盡してぞ書きたりける一宮此畫を御覽せられ無限御心にか、りければ此繪を暫く召し置かれ見るに慰む方もやとて巻返し御覽せらるれども御心更に慰ませめて御心を遣る方もやと御車に召され賀茂の糺の宮へ詣でさせ給ひ御手洗河の水を御手に結ばれて何となく河に遺棄せさせたまふにも昔業平中將戀せじと御板せしことも哀なるやうに思召し出されて

斯るとも神やはうけんかけをのみ御手洗河のふかさおもひを
と詠せさせ給ふ時しもあれ一念雨の過ぎ行く程木の下露に立ち濡れて御袖もしをれたるに

傳畧御宮崎金

日も早暮れぬと申す聲して御車を轟して一條を西へ過させ給ふに誰が栖む宿とも知らず
に苦むし死に松生ひて年久しく住み荒したる宿も物さびしげなるに撥音高く青海波をぞ
調へたる怪しやこわ如何なる人ならんと通難に御車を駐めさせて遙に見入れさせ給ひけれ
ば見る人ありとも知らざる体にて暮れたる空の月影時雨の雲間より幽々と驅れ出でたるに
御殿を高く捲き上げて年の程二八ばかりなる女房のいふばかりなくあてやかなるが秋の別
を暮る琵琶を彈ざるにてぞありける宮御目もあやに熟々と御覽ざるに此程をいるに御心を
盡して夢にもせめて逢ひ見ばやと戀ひ悲み給ひつる似繪に少しも違はせ向あてやかにらう
たげにていはん方なくぞ見わたる御心地空に浮れてたどくし程にならせ給へば御
車より下りさせ給ひて築山の松の木蔭に立ち寄らせ給へば女房見る人ありと物わびしげに
て琵琶をは几帳の傍に指し寄せて内へ紛れ入りぬ引くや裳裾の白地なる面影に又立ち出づ
ることもやとて立徘徊はせ給ひたれば怪しげなる御所侍の御隔子進らす音して早人しづ
まりぬればいつまでかくてもあるべさとして宮還御なりぬ繪に書きたりし形にだに御心を惱
されし御事なりまして實の色を御覽せられては如何せんぞ御戀ひ忍ばせ給ふもげにことわ
りなり其後よりはひたすらなる御氣色に見ながら流石御同には出されざりけるに常に御

傳畧御宮崎金

會に参り給ふ二條中將爲冬いづぞや賀茂の御かへさの幽なりし宵の間の月を又も御覽せま
はしく思召さる、にや其事ならばいと安きとにて彼女房の行末を委しく尋ねて候へば今出
河右大臣公顯の女なるを徳大寺左大將に申し名けながら未皇太后宮の御匣にて候なる切に
思召され候は、歌の御會に申し寄せて彼亭へ入らせ給ひて玉垂の際にも自ら御心露す御事
にて候へかしと申せば宮例ならせ御快げに打笑せ給ひて纏て今夜其亭にて褒貶の御會ある
べしと右大臣の方へ仰出されければ公顯添しと取りきらめきて數寄の人餘多集めてかくと
案内申せば宮爲冬ばかりを御供にて彼亭へ入らせ給ひぬ歌の事は今夜さまでの御本意なら
ねば只披露ばかりにて褒貶はなし主の大臣のゆるぎのいそぎありきて土器もて参りたれば
宮常よりも興せさせ給ひて野曲絃歌の妙々に御盃たまはせ給ひたるに主も痛く酔ひ臥し
ぬ宮も御枕を傾けさせ給へば人皆定りて夜も已に深けにけり媒の左中將心ありて酔はざり
ければ其案内せさせて彼女房の柵みける西の臺へ忍び入らせ給ひて塙の際より見給へば燈
の幽なるに花紅葉散り亂れたる屏風引き廻し起もせせ寝もせぬ体に打ちしをれ只今人々の
詠みたりつる歌の短冊取り出して顔打ち傾けたればこぼれ懸りたる髪のはづれよりにはや
かに幽なる容貌露を含める花の曙の風に隨へる柳の夕の氣色繪に書くとも筆も及び難く語

傳畧御宮崎金

るに言もなかるべし外ながら幽に見てしかたの世に又類もやあらんと怪しままでと思ひ
しは尙敷ならざりけりと御覽に居給ふに此心も早はれくとなりて不_レ知我魂も其袖の中
にや入りぬらんとある身ともなく覺ぬさせ給ふ時節邊に人もなくて燈さへ幽なれば妻戸を
少し押し開けて内へ入らせ給ひたるに女は驚く貌にてもあら老のどやかにもてなしてやは
ら衣引き被きて臥したる化粧いひしら老なよかに開麗なり宮も傍に寄り臥させ給ひてあ
りしながらの心づくし哀なるまでに開けけれども女はいらへも申さ老只思ひにしをれたる
その氣色誠に句深くして花薫り月霞む夜の手枕に見はてぬ夢の化ある御心まよひに明くる
も知ら老語らひ給へとも尙強顔氣色にて程經ぬれば己か翅を並べながら人の別をも思ひ知
りぬ八聲の鳥も告げわたり涙の水解けやら老衣々も冷やかになりて類も怨き有明の強顔影
に立ち歸らせ給ひぬ其後より度々御消息ありていふばかりなき御文の數早千束にもなりぬ
らんと覺ゆる程に積りければ女も哀なる方に心ひかれて上れば下る船船の否にはあら老と
思へる氣色になん顯れたりされとも尙互に人目を中の關守になして月比過させ給ひけるに
只御心の中には懸ひ悲ませ給ひけれども御詞には出され老御文をだに書き絶てかくども
ぬ開ねは百夜の端書今は我は數書くまじと打ち佐びて海士の蒔藻に思ひ亂れ給ふかくて月

傳畧御宮崎金

日も過ぎければ徳大寺此事を聞及び左様に宮なんどの御心に懸けられんをいかでか便なう
さる事あるべきとて早あらぬ方に通ふ道ありと開けければ宮も今は御慥なく重ねて御文の
ありしに何よりも黒み過きて

知らせばや鹽やく浦の煙だにおもはぬ風になひくならひを
女もはやあまりつれなかりし心のほど我ながら憂ものに思ひ返す心地になんなりにければ
詞はなくて

立ちぬべきうき名をかねて思はずは風に煙のなびかさらめや

其後よりは彼方此方に結び置れし心の下紐打ち解けて小夜の枕を河島の水の心も淺からぬ
御契になりしかば生きては僧老の契深く又死しては同じ昔の下にもと思召し通はして十月
あまりになりけるに又天下の亂出て来て一宮は土佐の畑へ流されさせ給しかば御息所は一
人都に留まらせ給ひて明くるも知らず嘆き沈ませ給ひてせめてなき世の別なりせば愛に堪
へぬ命にて生れ逢はん後の契を懸むべきに同じ世ながら海山を隔て、互に風の便の音信を
だにも書き絶て此日比召仕はれける青待官女の一人も參り通は老萬昔に替る世になりて
人の住み荒らしたる蓬生の宿の露けきに御袖の乾く際もなく思召し入らせ給ふ有様いかで

傳畧御宮崎金

か涙の玉の緒もなからへぬらんと怪しきほどの御事なり宮も都を御出ありし日より公の御事御身の悲一方ならせ晴れやらぬに又打ち添へて御息所の御名殘是や限と思召し、かば供御も開召し入れられせ道の草葉の露どもに消はてさせ給ひぬと見ゆさせ給ふ惜しども思召さぬ御命なからへて土佐の畑といふ所のあさましく此世の中ども覺ぬ浦の邊に流されて月日を送らせ給へば晴る、間もなき御歎嘘へていはん方もなし餘りに思ひくづをれさせ給ふ御有様の御痛しく見奉りければ御誓固に候ひける有井庄司何かくるしかるべき御息所を忍びて此へ入進らせられ候へて御衣一重したて、道の程の用意まで細々に沙汰し進らせければ宮限なく嬉しと思召して只一人召仕はれける右衛門府生奏武文と申す隨身を御迎に京へ上せらる武文御文を賜りて急ぎ京都へ上り一條堀川の御所へ参りたれば葎茂りて門を閉ぢ松の葉積りて道もなし音づれ通ふものとは古き櫓の夕嵐軒もる月の影ならでは問ふ人もなく荒れはてたりさてはいづくにか立ち忍ばせ給ひぬらんと彼方此方の御行末を尋ね行く程に嵯峨の奥深草の里に松の袖垣あらはなるに葛はひか、りて池の姿もまびしく汀の松の嵐も秋すさまじく吹きしをり誰栖みぬらんと見るも物うけなる宿の内に琵琶を弾きる音しけり怪しやと立ち留りて是を聞けば紛方なき撥音なり武文嬉しく思ひて中々案内

傳畧御宮崎金

も申させ築地のやふれより内へ入りて中門の櫓の前に畏れば破れたる御簾のうちより遙に御覽せらるあれやとばかりの御聲幽に聞ゆながら何とも仰出さる、事もなく女房違敷多ささめきあひて先づ泣聲のみを聞ゆる武文御使に罷り上り是まで尋ね参りて候と申しもあへせ様に手を打ち懸けてさめくぐと泣き居たりや、ありて只此迄と召あれば武文御簾の前に跪き雲井の外に想像進らすも堪へ忍び難き御事にて候へば如何にもして田舎へ御下り候へどの御使に参りて候よとて御文捧げたり急ぎ披きて御覽せらるに實にも御思ひの切なる色さもこそと覺ゆしか言の葉ごとに置く露の御袖に餘るばかりなりよしや如何なる奥の柄なりとも其憂にこそせめては堪へめとて既に御門出ありければ武文かひくしく御興なんと尋ぬ出し先づ尼崎まで下し進らせて渡海の順風をぞ相待ちける斯りける折節筑紫人に松浦五郎といひける武士此浦に風を待ちて居たりけるが御息所の御かたちを牆の隙より見進らせてこそも天人の此土へ天降れるかと目かれもせ守り居たりけるが如何なる女院姫宮にても座しませ一夜のはとの契を百年の命に代へんは何か惜しからん奪ひ取りて下らばやと思ひける所に武文が下部の濱邊に出で行きけるを呼び寄せて酒飲せ引出物なんと取せてさるにても御邊が主の具足し奉りて船に召さんとする上臈は如何なる人にて御渡ある

傳 畧 御 宮 崎 金

ぞと問ひければ下藤のはかなさ酒にめて引出物に耽りて事の機謀のま、にぞ語りける
松浦大に悦びて此比如何なる宮にても御座せよ謀叛人にて流され給へる人の許へ忍びて下
し給はんぞる女房を奪ひ捕りたりともさしての罪科はよもあらじと思ひければ郎等共に彼
宿の案内能々見かかせて日の暮る、をぞ相待ける夜既に深けて人しづまる程になりければ
松浦が郎等三十餘人物具ひし、と堅めて續松に火を立て、葎戸を踏み破り前後より打
ちて入る武文は京家の者といひながら心剛にして日比も度々手柄を顯したる者なりければ
強盜入りたりと心得て枕に立たる太刀をかつ取りて中門に走り出で打ち入る敵三人を目の
前に切りふせ椽にあがりたる敵三十餘人大庭へ颯と追出して武文といふ大剛の者こ、にあ
り捕れぬものをとらんとて二つなき命をな失ひそ盗人共と呼りて仰たる太刀押し直し門の
脇にぞ立ちたりける松浦が郎等共武文一人に切り立てられて門より外へはつと逃げたりけ
るがきたなし敵は只一人を切りて入れとて傍なる在家に火をかけて又喚きてぞ寄たりける
武文心は猛しといへども浦風に吹き覆はれたる烟に目暮れて防ぐべきやうもなかりければ
先づ御息所を掻負ひ参らせ向ふ敵を打拂ひて澳なる船を招き如何なる船にてもあれ女性暫
く乗せ進らせてたび候へと申して汀にぞ立ちたりける船もこそ多かるに松浦が迎に來たる

傳 畧 御 宮 崎 金

船是を聞きて一番に港へ寄せたれば武文大に祝びて屋形の内に打ち置き奉り取り落したる
御具御伴の女房達をも船に乗せんとて走り歸へりたれば宿には早火をかけて我方様の人も
なくなりにけり松浦は適我船に此女房の乗せ給ひたる事限りなく悦び今は皆船に乗れとて
郎等眷屬百餘人取物もとりあへそ皆此船に取り乗りて渺の澳にぞ漕ぎ出したる武文渚に歸
り來りて其御船寄られ先ん屋形の内に置き進らせつる上藤を陸へ上げ進らせんと喚りけ
れとも耳にな聞き入れそとて順風に帆を上げたれば船の次第に隔りぬ又手練する海士の小
舟に打ち乗りて自ら櫓を推しつ、何共して御船に追ひ着かんとしければとも順風を得たる大
船に押手の小舟追ひつべくにあらそ遙の沖に向ひて扇を挙げ招きけるを松浦が船にとつ
と笑ふ聲を聞きて安からぬものかな其儀ならば只今のほどに海底の龍神となりて其船をば
遣るまじきものをと忿りて腹十文字に掻き切りて蒼海の底にぞ沈みける御息所は夜討の入
りたりつる宵の間のさわざより肝心も御身に副はそ只歩の浮橋浮沈み淵瀬をたどる心地し
て何となり行くこと、も知らせ給はそ船の中なるものともがあれ大剛のものかな主の女
房を人に奪はれて腹を切りつるあはれさよと沙汰するを武文が事やらんとは聞召しながら
其方をだに見遣らせ給はそ只衣引き被さて屋形の内に泣き沈ませ給ふ見ると恐しくむくつ

傳 畧 御 宮 崎 金

けいなる髭男の聲いとなまりて色飽まで黒きが御傍に参りて何をかさのみむつからせ給ふ
を面白き道すがら名所ともを御覽じて御心をも慰ませ給へと兎角慰め申せども御顔をも更
に撥げさせ給はせ只鬼を一車に載せて巫の三峽に棹さすらんも是には過ぎじと御心迷ひて
消ぬ入らせ給ひぬべければむくつけ男も舷に寄りかゝりて是さへあされたる体なり其夜は
大物の浦に艇を下して世を浦風に漂ひ給ふ明くれば風能くなりぬとて同じ泊の船とも帆を
引き梶を取り己がさまたま漕ぎ行きければ都は早跡の霞に隔りぬ九國にいつか行き着かん
せらんと人のいふを聞召すにぞさては心づくしに行き旅なりと御心細きにつきても北野天
神荒人神にならせ給ひし其古の御悲思召し知らせ給はし我を都へ歸し御座せと御心の中に
祈らせ給ふ其日の暮程に阿波の鳴戸を通る處に俄に風替り鹽向ひて此船更に行きやら老船
人帆を引き近邊の磯へ船を寄せんとすれば澳の鹽合に大なる穴の底も見ぬぬが出で来て
船を船底に沈めんとす水主梶取あはて、帆藤などを投入れく渦にまかせて其間に船を
漕ぎ通さんとするに船曾て去らす渦巻くに随ひて浪と共に船の廻る事茶臼を推すよりも尙
速なり是は何様龍神の財寶に目懸られたりと覺わたり何を海へ入れよとて弓筒、太刀、
刀、鎧、腹巻敷を盡して投げ入れたれとも渦巻くこと尙休ますまては若し色ある衣裳にや

傳 畧 御 宮 崎 金

目を見入れたるらんとて御息所の御衣赤き袴を投げ入れたれば白浪色變して紅葉を浸せる
が如くなり是に渦巻き少しまづまりたれと船は尙本の所にぞ廻り居たるかくて三日三夜に
なりければ船の中の人一人も起き上らせ皆船底に酔ひ伏して聲々に喚き叫ぶ事限りなし御
息所はさらぬだに生きる御心地もなき上に此浪のさわぎに尙御肝消ぬて更に人心もましま
さまよしや憂目を見んよりは如何なる淵瀕にも身を沈めばやどは思召しつれどもさすがに
今を眼と叫ぶ聲を聞召せば千尋の底の水層となり深き罪に沈みなん後の世をだに誰かは知
りて訪はんと思召す泪さへ盡きて今は更に御頭を撥げさせ給はせむくつけ男も早忙然とな
りてかゝるやんごとなき貴人を取り下る故に龍神の咎もあるやらん詮なき事をもしつるも
のかなど誠に後悔の氣色なり斯る處に梶取一人船底より遶出で、此嶋渡と申すは龍宮城の
東門に當りて候ふ間何にても候へ龍神のはしがらせ給ふものを海へ沈め候はねばいつもか
やうの不思議ある所にて候是は何様上臈を龍神の思ひかけ申されたりと覺ぬ候申すもあま
りに邪見に情なく候へとも此御事一人の故に若干の者どもが皆非分の死を仕らんことは不
便の次第にて候へば此上臈を海へ入れ進らせて百余人の命を助けさせ給へと申しける松浦
元來情なき田舎人なればさても命やたすかると屋形の内へ参りて御息所を荒らかに引き起

傳畧御宮崎金

し奉り餘に強顔御氣色をのみ見奉るに本意なく存じ候へば海に沈め進らすべきにて候御契
深くば土佐の畑へ流れよらせ給ひて其宮とやらん堂とやらん一つ浦に住せ給へど情なく
挿き抱き進らせて海へ投げ入れ奉らんとす是程の事になりては何の御詞かあるべきなれば
只夢のやうに思召してつやく息をも出させ給はせ御心の中に佛の御名ばかりを念し思召
して早絶の入りせ給ひぬがと見たり是を見て僧の一人便船せられたるが松浦が袖を懸へ
てこは如何なる御事にて候ふぞや龍神と申すも南方無垢の成道遂げて佛の授記を得たる
ものにて候へば全く罪業の手向を受くべからせしかるを生ながら人を忽に海中に沈められ
なは彌龍神怒りて一人も助るものや候ふべき只經を讀み陀羅尼を滿て、法樂に備られ候は
んするこそ然るべく覺候へと堅く制止宥めければ松浦理に折れて御息所を蓬屋の内に荒
らかに投げ棄て奉るさらば僧の儀につきて祈りをせよとて船中の上下異口同音に觀音の
名號を唱へ奉りける時不思儀のものとも波の上に浮び出て見たり先づ一番に濃紅着たる
仕丁が長持を昇ぎて通ると見ぬて打ち失せぬ其次に牽毛の馬に白鞍置きたるを舍人八人し
て引きて通ると見ぬて打ち失せぬ其次に大物の浦にて腹切りて死にたりし右衛門府生泰武
文赤絲威の鏡同じ毛の五枚甲の緒を締め黄綱毛なる馬に乗りて弓杖にすがり皆紅の扇を舉

傳畧御宮崎金

げ松浦が船に向ひて其船留れと招くやうに見ぬて涙の底にぞ入りける梶取是を見て灘を
走る船に不思儀の見ゆることは常の事にて候へとも是は如何様武文が怨靈と覺へ候其驗を
御覽せんために小舟を一艘下して此上藤を乗せ進らせ波の上に突き流して龍神の心を如何
と御覽候へかしと申せば御儀げにもとて小舟一艘引き下して水主一人と御息所とを乗せ奉
りて渦の波に漲りて巻きかへる波の上を浮べける彼早離凍離の海岸山に放たれ飢寒の愁
深くして涙も盡さぬといひけんも人住む島の中なれば立ち寄る方もありぬべし是は浦にも
あら老島にもあら老如何に鳴渡の涙の上に身を捨て船の浮き沈み鹽瀬に廻る泡の消ぬなん
ことこそ悲しけれされば龍神もなら老中をやさけられけん風俄に吹き分きて松浦が船は
西を指して吹れ行くを見ぬけるが一の谷の澳津より武庫山風に放たれて行方知らせもなり
にけり其後波静り風止みければ御息所の御船に乗りつる水主かひくしく船を漕ぎ寄せて
淡路の武島といふ所へ着け奉り此島の爲体廻一里に足らぬ所にて釣する海士の家ならでは
住む人もなき島なれば隙あばらなる葦の屋の憂さふししげき栖處に入れ進らせたるに此四
五日の波風に御肝消の御心弱りて懸て絶の入りせ給ひけり心なき海士の子ともまても是は
如何にし奉らんと泣き悲み御顔に水を漉き櫓床を洗ひて御口に入れなんとしければ半時ば

傳畧御宮崎金

も遠くやとて御袖濡る、ばかりなり宮は又外渡る船の葉に書くとも盡さぬ御狀なき跡
問ひし月日の數御身に積りしかなしみは語るも言はるるかなりとかさ口説せ給ひけるさし
も憂かりし世中の時の間に引替へて人間の榮花天上の娛樂極めせといふことなく盡さざと
いふ御遊もなし長生殿の裏には梨花の雨壞を破らぞ不老門の前には楊柳の風枝を鳴らす
今日を千年のはじめとめでたきためしに思召したりしに榮盡きて悲來る人間の習なれば中
一年ありて建武二年の冬の頃より又天下亂れて武家の成敗になりしかば一宮は終に越前金
崎の城にて御自害ありて御首京都に上せて禪林寺長老夢窓國師喪禮執り行はるなど聞ゆし
かは御息所はあまりの爲ん方なさに御車に助け載せられて禪林寺の邊まで出させ給へば是
ぞ其御事と思しくて戀染の夕の空に立つ煙松の嵐に打ち靡き心細く澄み上るさらぬ別の悲
しさは誰とてもおろかならぬ涙なれども宮などのやんごとなき御身を劍の先に觸れて秋の
霜の下に消ぬ果てさせ給ひぬる御事は類なき悲なれば想像奉る今はの際の御有様も今一入
のおもひを添へて共に東岱前後の煙と立ちのぼり北山新丘の露とも消ぬなばやと返る車の
常盤に臥し沈ませ給ひける御心の中こそ哀なれ行きて舊跡を訪へば竹苑故宮の月心を傷し
め歸りて塞園に臥せば柳房寡居の風夢を吹き見るにつけ聞に隨ふ御嘆日ごとに深くなり行

傳畧御宮崎金

きければ戀て御息所も御心地煩ひて御中陰の日數終へざる先にはかなくならせ給ひければ
聞く人ごとにおしなべて類少きあはれさに皆袂をぞ漏しける
編者云此一章は太平記十八の巻にあるものを載せてまた見ぬ人のためにもどかくはもの
せしなり所々にあやしきふし／＼も多かんめれとそひかしを今より考へ知るべきにあ
らそ亦是をたゞさんとすれば却て眞を失ひて哀れ深き所も情なきに至らんことを恐れさ
のみ文体を變更せざるなりされとあまりくた／＼しき所はいさ、かはよきて讀者の便と
なしぬ概ね古へ文のまゝ、を巻末にそへて此編の結末とする事しかり

中官幣 金崎宮御畧傳終

明治廿六年四月廿七日印刷
明治廿六年五月四日發行

正價金拾五錢

版權登錄

版權所有

著者

福井縣敦賀町大島第四百七十七番地
松尾忠吉

印刷者

大阪東區南久寶寺町四丁目九十九番邸
阪俊藏

發行所

名古屋市本町通六丁目六十九番戶
東雲堂本店

發行所

東京市京橋區中橋和泉町四番地
東雲堂

發行所

大阪市東區南久寶寺町四丁目九十八番邸
東雲堂

販賣所

福井縣敦賀町蓬萊第二十九番地
西野有慶堂
(大阪東區平野町四丁目九十一番邸日進堂印刷)



特45

327

金崎宮御略伝

国立国会図書館

013915-000-7

特45-327

金崎宮御略伝(官幣中社)

松尾 忠吉/著

M26

ABB-0155

